

明日の暮らし、ささえあう

CO-OP 共済



地域ささえあい助成

— 生協と他団体が協同する活動を応援します —

2018年度 活動報告集



日本コープ共済生活協同組合連合会

はじめに

日本コープ共済生活協同組合連合会（以下、コープ共済連）では、社会貢献活動として2012年度に「CO・OP 共済 地域ささえあい助成」を開始し、2018年度に7年目を迎えました。

生協は、くらしを向上させることを目的に事業を進めていますが、昨今の少子高齢化、貧困など、くらしに関する困難は、地域社会全体に目を向け、他団体・行政とも一緒になって必要な取り組みを行わなければ解決できない状況になってきています。そのため、本助成では、生協と他団体がネットワークを形成しながら問題を解決していく活動を支援することにしており、あわせて、次の3つのテーマにそった取り組みを助成の対象としております。

①くらしを守り、くらしの困りごとの解決に資する

②命を守り、その人らしい生き方ができるようにする

③女性と子どもが生き生きする

2018年度は76件のご応募をいただき、審査委員会において44件、2,120万3,306円の助成を決定しました。なお、選定にあたっては次の選考基準を設け審査を進めました。

選考基準

①生協と地域の他団体との協同により成り立つ活動であること、②計画の実現性、③予算計画の妥当性、④対象者のニーズに基づく活動であること、⑤多様な地域住民の関わりや参加度、⑥活動の新規性や先駆性

※過去に助成を受けたことのある団体では、取り組みの発展性にも着目しました。

※協同の取り組みができていくかという点では、他団体と協同することで新たな広がりが期待できるか、または、生協がしっかり役割を発揮できているかを着眼点としました。

✳活動7年目を迎えて

本助成は2018年度で7年目を迎えました。協同の輪の広がりを感じさせる新たな実践もみられ、助成金満額の100万円を助成した3団体は、いずれも新規に応募を受け付けた活動でした。しかしながら、一部には従前の内向きの行事的活動も見られました。とくに継続して申請があった団体については、活動の自立を促していくため、また活動の発展性を踏まえて厳格に審査いたしました。上記の選考基準を参考に、次年度以降の応募でも、より発展的な活動を申請されることを期待します。

2018年度は、助成団体や生協、応募を検討している団体を対象に、2017年度に引き続き3回目となる団体交流会を開催しました。福岡と宮城の2会場でのべ57名にご参加いただき、参加者からは「他団体の方々の意見や活動を聞けてとても参考になり刺激にもなった」「助成金がこれだけの人を幸せにし、活かされていることに助成の大切さを感じた」「全国の生協のつながりに感動した」など、前向きな意見が数多く聞かれました。住環境が急激に変化する地域の中で、団体交流会から学び取った協同の力を生かし、住民の皆さんを巻き込んだコミュニティの再構築を実践されることを期待します。

✳さらなる発展を目指して

今日、求められる地域共生社会づくりの活動は、生協とともに活動する団体との連帯が不可欠であり、本助成がそのきっかけづくりになることを切に願います。そのために、地域でのネットワーク形成の促進や助成応募がより活発になるよう、2019年度も団体交流会を開催し、助成の条件の一つである「協同の取り組み」について、具体的なモデルを明らかにしていきます。今後も、生協と地域の団体が一緒になって取り組むことにより、地域に根差した活動がさらに促進されることを期待しています。引き続き、皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

2018年度 CO・OP共済 地域ささえあい助成 審査委員会
委員長 上野谷 加代子（同志社大学 社会学部 教授）

はじめに	1
------------	---

2018年度 CO・OP共済 地域ささえあい助成 審査委員会

委員長 上野谷 加代子(同志社大学 社会学部 教授)

2018年度「CO・OP共済 地域ささえあい助成」助成先一覧	4
--------------------------------------	---

活動報告集



① 暮らしを守り、暮らしの困りごとの解決に資する

■ 南大沢を知ってほしい会 「みなみおおさまカフェ」の開催を主として大学と地域を結ぶ	7
■ 公益社団法人 フードバンクかながわ フードバンクかながわを設立し、運営を開始	8
■ 「さろん de 志氏我野」運営委員会 子どもと高齢者のサポート、安らぎ・寛ぎの場提供	9
■ 大阪いずみ市民生活協同組合 地域の居場所づくりとして高齢者、学童、乳幼児の子育てを支援	10
■ ボランティア団体「ハートハース」 安心をはぐくむ居場所づくり	11
■ 倉敷医療生活協同組合 水島地域での小さな助け合い活動	12
■ 鹿児島県生活協同組合連合会 鹿児島県における住民が主人公の地域づくりの実践交流の場とネットワークづくり	13
■ 特定非営利活動法人 フードバンクふじのくに 協同で命と環境を守るフードバンク活動	14
■ フードバンク奈良 フードバンク事業	15
■ エフコープ生活協同組合 「平成29年7月九州北部豪雨」災害により設けられた応急仮設住宅入居者の心身の健康づくり	16
■ 認定特定非営利活動法人 まちぽっと 高齢者等「住宅確保要配慮者」に対する居住・見守り支援の担い手・ネットワークづくり	17
■ 特定非営利活動法人 フードバンク信州 本部拠点の強化	18
■ いばらきコープ生活協同組合 おたがいさま水戸（生活支援を行う任意団体の設立）	19
■ 生活協同組合コープしが 生協と社協による住民の暮らしを支えるプロジェクトⅢ（実践編）	20
■ 宝塚23万人の防災キャンプ実行委員会 宝塚23万人の防災キャンプ2018 WITH コミュニティ末広	21
■ 特定非営利活動法人 フードバンク八王子えがお 食に困る方々を地域で支えるフードドライブ活動の展開	22
■ 生活協同組合コープこうべ コープは～とらんどハイム本山 秋まつり	23
■ 京都生活協同組合 地域の居場所作り推進及び、リーフレット作り	24
■ コープ自然派奈良 アートが結ぶ東日本大震災被災者の保養受け入れと避難者交流	25

② 命を守り、その人らしい生き方ができるようにする

■ 一般社団法人 やまなし空と風-Discovery Of Life ほくとProof of Life プロジェクト（人それぞれの生きる証をみつける活動）	27
--	----

■生活協同組合パルシステム千葉 元気な高齢者が軸となる、パルシステム千葉多世代交流での地域コミュニティづくり	28
■フードバンクちば いのちをつなごう～フードバンクちば・県内生協連携キャンペーン	29
■きらくクラブ みんなで作ろう！ 私たちの居場所「きらくクラブ」	30
■特定非営利活動法人 あなただけの乳がんではなく 乳がん啓発・ピンクリボンセミナー	31
■富山県生活協同組合連合会 福島の子ども保養プロジェクト in とやま2018	32

テーマ

③ 女性と子どもが生き生きする

■特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫 つながる「居場所」のつくり方～ここからカフェ～	33
■NPO法人 福島SAND-STORY 福島県の子どもの肥満防止等健康づくりのための屋外遊びと生活改善プロジェクト	34
■なのはな生活協同組合 こども食堂からべえ・貧困と教育を考える	35
■特定非営利活動法人 いなほ 住民が主体で行う子どもの健全育成等を目的とした共生型「子ども食堂」の自立に向けた運営支援事業	36
■生活協同組合コープみらい 地域クラブひだまり いじめ・不登校・ひきこもりから地域・社会のつながりへ	37
■生活協同組合おおさかパルコープ 子育てママからおばあちゃんまで安心できる地域づくりを	38
■子育て交流の広場ほっぺ 妊娠期からの子育てを支える広場	39
■北海道子どもの本連絡会 第41回北海道子どもの本のつどい砂川大会	40
■特定非営利活動法人 まんまるママいわて 助産師とママでつくる、おいしく元気に笑顔になる子育て応援事業	41
■富山県有機農業研究会 富山型CSA（消費者参加型農場）構築に向けての啓発活動	42
■特定非営利活動法人 ISC糸島スポーツクラブ コミュニティカフェ 寄り合い処プロジェクト ST-2	43
■特定非営利活動法人 ユースコミュニティ 地域子ども未来塾	44
■特定非営利活動法人 熊本市子ども劇場連絡会 みんなで学ぼう0123（おいっちにーさん）！ ～メディアとあそびについて～	45
■生活協同組合とくしま生協 福島の子ども保養プロジェクト	46
■新潟県立大学 南相馬市子ども支援プログラム 南相馬市児童クラブにおけるすべての地域で実施する「交流おやつタイム」プログラム	47
■puchi puchi 親子で楽しめるキッズスペース	48
■生活協同組合CO・OPとやま 女性と子どもが農業や食を通じ生きることへの学びとする活動	49
■あくらす 地域で繋がり、生活しあい、育ちあう場所の提供と安心して暮らせる地域を目指す拠点づくり	50
■金子みんな食堂運営委員会 学習支援付き食事会	51

2018年度「CO・OP共済 地域ささえあい助成」団体交流会 開催報告	52
-------------------------------------	----

1

くらしを守り、くらしの困りごとの解決に資する

■ 南大沢を知ってほしい会

《協同団体》

- 首都大学東京生活協同組合
- 八王子市地域包括支援センター南大沢
- 首都大学東京和気ゼミ・和田ゼミ
- 八王子市民活動協議会

■ 公益社団法人 フードバンクかながわ

《協同団体》

- 神奈川県労働者福祉協議会
- かながわ勤労者ボランティアネットワーク
- 神奈川県労働者共済生活協同組合
- 中央労働金庫神奈川県本部
- 公益財団法人横浜YMCA
- 公益財団法人かながわ生き生き市民基金
- 特定非営利活動法人参加型システム研究所
- 神奈川県農業協同組合中央会
- 神奈川県生活協同組合連合会
- 生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ
- 生活クラブ生活協同組合（神奈川）
- 生活協同組合ユーコープ

■ 「さろん de 志氏我野」運営委員会

《協同団体》

- 生活協同組合コープみえ 四日市センター

■ 大阪いずみ市民生活協同組合

《協同団体》

- 堺市中区社会福祉協議会
- UR団地 都市機構
- 堺市中区地域包括センター
- 八田荘西校区民生委員

■ ボランティア団体「ハートハース」

《協同団体》

- 市民生活協同組合ならコープ
- 奈良市社会福祉協議会
- 帝塚山大学心のケアセンター

■ 倉敷医療生活協同組合

《協同団体》

- 倉敷市社会福祉協議会
- NPO法人かけはし
- 倉敷市立短期大学 唐澤克樹教室
- （公財）水島地域環境再生財団

■ 鹿児島県生活協同組合連合会

《協同団体》

- 鹿児島県社会福祉協議会
- JA鹿児島中央会
- 曾於市福祉課など12団体にて実行委員会を結成

■ 特定非営利活動法人 フードバンクふじのくに

《協同団体》

- 生活協同組合ユーコープ

■ フードバンク奈良

《協同団体》

- 奈良県生活協同組合連合会
- 市民生活協同組合ならコープ

■ エフコープ生活協同組合

《協同団体》

- 杷木小学校応急仮設住宅自治会
- 旧宝珠山小学校運動場跡応急仮設住宅自治会

■ 認定特定非営利活動法人 まちぽっと

《協同団体》

- 生活クラブ生活協同組合（東京）
- アビリティクラブたすけあい
- 市民政策調査会

■ 特定非営利活動法人 フードバンク信州

《協同団体》

- 長野県生活協同組合連合会
- 長野県農協中央会
- 長野県労働者福祉協議会

■ いばらきコープ生活協同組合

《協同団体》

- 生活協同組合パルシステム茨城栃木
- 茨城保健生活協同組合
- NPO法人セカンドリーグ茨城

■ 生活協同組合コープしが

《協同団体》

- 社会福祉法人高島市社会福祉協議会
- 高島市住民福祉協議会

■ 宝塚23万人の防災キャンプ実行委員会

《協同団体》

- こむ1会
- コミュニティ末広
- 生活協同組合コープこうべ
- FMたからづか
- 宝塚青年会議所
- 宝塚商工会議所青年部

■ 特定非営利活動法人フードバンク八王子えがお

《協同団体》

- コープみらい地域クラブ「えがおのおすそわけ」
- 東都生活協同組合
- 自然派くらぶ生活協同組合
- 生活協同組合パルシステム東京

■生活協同組合コープこうべ

《協同団体》

- 東灘こどもカフェ
- ろっこう医療生協にじいろクリニック

■京都生活協同組合

《協同団体》

- 京都市上京区社会福祉協議会
- サービス付き高齢者住宅 咲くあん上京
- 興聖寺 ●乾隆・小川・誠逸の各地域包括センター
- 京都市域地域リハビリセンター

■コープ自然派奈良

《協同団体》

- 保養の旅えんむすび
- nara-action
- 一般社団法人はなまる

(19団体) 10,987,842円

2

命を守り、その人らしい生き方ができるようにする

■一般社団法人やまなし空と風-Discovery Of Life

《協同団体》

- 生活協同組合ユーコープ やまなし県本部

■生活協同組合パルシステム千葉

《協同団体》

- 習志野市東習志野地域包括支援センター
- 社会福祉法人八千代美香会プレーメン習志野
- ワーカーズコープちば

■フードバンクちば

《協同団体》

- 生活クラブ生活協同組合（千葉）
- なのはな生活協同組合
- 生活協同組合パルシステム千葉
- 生活協同組合コープみらい
- 千葉県生活協同組合連合会

■きらくクラブ

《協同団体》

- 生活協同組合ユーコープかながわ
たすけあいネットワーク
- フードバンクかながわ

■特定非営利活動法人あなただけの乳がんではなく

《協同団体》

- 生活協同組合コープかごしま
- 社会医療法人 博愛会相良病院

■富山県生活協同組合連合会

《協同団体》

- あさひふるさと体験推進協議会
- グリーンツーリズムとやま

(6団体) 2,289,408円

3

女性と子どもが生き生きする

■特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫

《協同団体》

- 生活協同組合コープこうべ第7地区活動本部
- 姫路市社会福祉協議会

■NPO法人 福島SAND-STORY

《協同団体》

- 生活協同組合コープふくしま
- 福島医療生活協同組合

■ なのはな生活協同組合

《協同団体》

- 加良部地区社会福祉協議会
- こども食堂からべえ運営委員会

■ 特定非営利活動法人 いなほ

《協同団体》

- 岩手県生活協同組合連合会
- 滝沢市社会福祉協議会
- わらしゃん井

■ 生活協同組合コープみらい 地域クラブひだまり

《協同団体》

- 不登校問題を考える東葛の会『ひだまり』
- 青空の会（我孫子）
- 学校に行かない子を持つ親の会吉川

■ 生活協同組合おおさかパルコープ

《協同団体》

- 大阪市北区社会福祉協議会

■ 子育て交流の広場ほっぺ

《協同団体》

- 生活協同組合コープこうべ第4地区活動本部

■ 北海道子どもの本連絡会

《協同団体》

- 北海道子どもの本のつどい砂川大会実行委員会
- 生活協同組合コープさっぽろ
- 日本児童文学者協会北海道支部

■ 特定非営利活動法人 まんまるママいわて

《協同団体》

- いわて生活協同組合

■ 富山県有機農業研究会

《協同団体》

- 生活協同組合CO・OPとやま

■ 特定非営利活動法人 ISC糸島スポーツクラブ

《協同団体》

- グリーンコープ生活協同組合ふくおか いとしま店
- コミュニティカフェ&デリことこと

■ 特定非営利活動法人 ユースコミュニティ

《協同団体》

- 生活協同組合パルシステム東京
- 大田区社会福祉協議会
- セカンドハーベストジャパン

■ 特定非営利活動法人 熊本県子ども劇場連絡会

《協同団体》

- グリーンコープ生活協同組合くまもと

■ 生活協同組合とくしま生協

《協同団体》

- 福島県生活協同組合連合会
- フードバンクとくしま

■ 新潟県立大学 南相馬市子ども支援プログラム

《協同団体》

- 南相馬市教育委員会
- 生活協同組合コープにいがた

■ puchi puchi

《協同団体》

- おうち de マルシェ
- 三礼庵（サンレー）
- エフコープ生活協同組合

■ 生活協同組合CO・OPとやま

《協同団体》

- 富山県有機農業研究会

■ あくらす

《協同団体》

- 生活協同組合コープこうべ 安倉店

■ 金子みんな食堂運営委員会

《協同団体》

- 金子みんな食堂運営委員会
- 生活協同組合コープえひめ

(19団体) 7,926,056円

※一部、申請金額より減額により助成とする。

総合計（44団体/応募：76団体）：21,203,306円

テーマ

1



**くらしを守り、
くらしの困りごとの
解決に資する**



南大沢を知ってほしい会

活動名 「みなみおおさまカフェ」の開催を主として大学と地域を結ぶ

活動のきっかけ

学生が地域の繋がり役となる事を期待して、当会と協同した地域貢献のためのプロジェクト「&TMU首都大学東京と地域で創る多世代交流」が活動のきっかけとなった。

活動内容概要

- ・「みなみおおさまカフェ」は、地域住民が気軽に大学に立ち寄り、学生たちとの交流の場となる活動。
- ・地域の住民同士のつながりの拠点ともなり、お茶を飲みながら学生たちと過ごせる居場所づくり。
- ・お互いが身近な存在となる事で、大学と地域の連携を深め災害時などの協力体制も視野に入れた活動。
- ・地域に愛着が持てるように、カフェの名称に地域のキャラクターを用いた。



協同した団体

- 首都大学東京生活協同組合
- 八王子市地域包括支援センター南大沢
- 首都大学東京和気ゼミ・和田ゼミ
- 八王子市民活動協議会

地域の概要

南大沢地域は八王子市の中でニュータウンとして開発された。開発後に入居された住民と旧住民とが共存している地域であり、高齢化も進んできている。

首都大学東京がある事で学生の街でもある。



他団体と協同することで発見したこと

- 各団体の特色を活かした協同により、1年を通して色々なアイデアのもと、カフェの運営にチャレンジする事ができた。
- 違う視点での意見交換や、参加者の喜びや期待を肌で感じ、回を重ねるごとに達成感を共有できた。
- 協同団体以外でも、地域ボランティアセンターに登録しているシニアの方々や、地域を熟知している民生・児童委員が協力してくれた事は大きな力となり、地域との橋渡しに大きく貢献してくれた。
- 学生が主体となる事で、自分たちも地域の一員だという意識の芽生えにつながった。

将来イメージ

- 地域における様々な問題に取り組める、仲間づくりを積極的に行いたい。その中で、各自の経験や知識・スキルなどを地域の資源として、地域の事をみんなで考えていく。特に若い世代には多くの参加を期待したい。
- 大学に留まらず、活動の拠点として公共の施設などと協同し、住民のニーズに答えられる選択肢を広げる事も全体として考えて行きたい。

成果と教訓

成果

- 毎月第2火曜日のAM10:00~12:00まで定例カフェを12回開催。
- 不定期で土曜日の午後にサタデーカフェを2回開催。
- 1年間で延べ853人の地域の方々がカフェに参加。
- 協同した団体・地区民生委員、地域ボランティア・学生ボランティアなど、延べ311人が参加。
- 月に一度の定例カフェが、高齢者の楽しみの一つとして生活に入り込んだ。
- ホームページを製作し活動内容の情報発信、それによって各方面からの取材も受け、周知につながった。
- 目的の「みなみおおさまカフェの開催を主として大学と地域を結ぶ。」事について、協同団体の努力により概ね達成できたと思う。

教訓

- 大学内の施設を利用しているので、安定したカフェの開催が困難な時もあった。
- 協同には、多くの学びがあったものの、一方では縦と横のつながりのバランスが取りづらい面も生じた。大人が学生を支えるという基本姿勢や体制づくりの構築に、もう少し丁寧に取り組む必要があった。協同において情報の共有は、最も重要である事が教訓になった。

公益社団法人 フードバンクかながわ

活動名 | フードバンクかながわを設立し、運営を開始

活動のきっかけ

神奈川県内で貧困対策活動ができないか、をテーマに各団体の責任者が集まり2015年から検討を行った。2015年9月に①生活困窮者の現状把握と支援活動の実践を学ぶ ②マイクロクレジット研究 ③フードバンク研究の目的で「マイクロクレジット研究会」を設置。2016年11月より、神奈川県内の協同組合、労働福祉団体、市民福祉団体によるフードバンクの検討会を経て、2017年4月に(仮称)フードバンクかながわ設立準備会を12団体21名にて結成。

活動内容概要

個人や団体・企業から消費するには十分安全であるにもかかわらず廃棄されてしまう食料の寄贈を受け、支援を必要としている生活困窮者等に非営利団体を通じて適切に配るフードバンクシステムの確立をめざす。あわせて、この事業を通じ地域の「たすけあい」「支え合い」「分かち合い」、相互扶助の社会づくりをめざすとともに、社会の食品ロス削減に向けた意識の向上を図り、社会福祉及び資源・環境保全の増進に寄与する。

協同した団体

- 神奈川県労働者福祉協議会
- かながわ勤労者ボランティアネットワーク
- 神奈川県労働者共済生活協同組合
- 中央労働金庫神奈川県本部 ●公益財団法人横浜YMCA
- 公益財団法人かながわ生き生き市民基金
- 特定非営利活動法人参加型システム研究所
- 神奈川県農業協同組合中央会 ●神奈川県生活協同組合連合会
- 生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ
- 生活クラブ生活協同組合(神奈川) ●生活協同組合ユーコープ



地域の概要

神奈川県は家庭系の食品ロスも多く、横浜市の調査(2015年)では、食品ロスが11.1万トンある一方、明日の食事に事欠く方々(生活困窮者等)が、150万人以上もいると推計されている。

- ・神奈川県: 19市13町1村 人口: 918万人
- ・神奈川県推定貧困率: 16.7% (153万人)
- ・一人親世帯: 33万世帯 (約88万人)
- ・食品ロス神奈川県の家庭: 推定19万トン、全国646万トン(内事業系357万トン)



他団体と協同することで発見したこと

今回協同した団体は、生協のほか農協、労働福祉関係団体、市民団体(公益財団)の12団体であったが、労働福祉関係団体は行政とのパイプが太く、フードバンクの説明の場には行政から副市長や局長も多く出席され、その後の進展が早かった。また、設立記念フォーラムには県知事や政令市副市長にも登壇頂く等、幅が広がった。

そのほか協同組合関係は、食品関連事業者への協力要請、また、市民団体は地域の支援団体や子ども食堂等との連携推進に貢献した。各団体の特色を活かして、準備や活動をすすめることにより、目標以上にフードバンク活動が広がった。

将来イメージ

神奈川県全域に対応できるよう食品寄贈事業者等の拡大、中継拠点(食品受渡場所)の増設と併せて、行政や社協、食支援団体等との連携強化を図り、「もったいない」「分かち合い」～「ありがとう」へをさらにすすめたい。

2019年度目標 取扱量 63トン

連携支援団体数 110団体(行政・社協含む)

2020年度目標 取扱量 100トン

連携支援団体数 150団体(行政・社協含む)

成果と教訓

成果

- 目標を上回った事項
- ・寄贈頂いた食品(重量) 目標=32.0トン → 3/25現在=45.7トン
- ・提供した食品(重量) 目標=30.0トン → 3/25現在=37.9トン
- ・寄贈団体数(社) 目標=30社 → 3/25現在=31社(団体)
- ・提供団体数(登録数) 目標=36団体 → 3/25現在=90団体
- ・寄付金等 目標=221,000円 → 3/25現在=6,066,734円

主な活動内容

- ・寄贈者(企業等)向けの案内書の作成と配布
- ・フードバンクを活用いただく、行政・社協・支援団体等向けの「利用案内書」の作成と配布。HPでも案内。
- ・入出庫管理システムを導入・活用し、トレースアビリティ確保のための仕組みづくり(運営マニュアル作成)をすすめた。
- ・フードバンクに支援(食品寄贈、賛助会員)いただく企業等の拡大のため、主要(大手)企業を訪問し、協力要請をした。
- ・食品寄贈予定の企業等との連絡調整方法についてHPでも案内。
- ・対応エリアを拡大するために、中継拠点(食品の受渡し場所)の設置をすすめる。



教訓

- 目標を下回った事項
 - ・賛助会員数 目標=75団体500名 → 3/25現在=40団体103名
 - ・賛助会費額 目標=3,000,000円 → 3/25現在=2,309,000円
- ※正会員団体内部の合意形成に時間がかかったこともあり目標を達成することはできなかったが、来年度以降は期待できる。



「さろん de 志氏我野」運営委員会

活動名 | 子どもと高齢者のサポート、安らぎ・寛ぎの場提供

活動のきっかけ

大規模災害が起これば、地域のきずなの必要性が喧伝されますが、きずなの形成には平素からの住民間交流が欠かせません。また、団塊世代が高齢化を迎え、高齢者の介護予防は喫緊の課題となっています。一方で、核家族化が進み、子育ての悩みを相談する相手がいない母親、ひとり親家庭が増えて、相対的貧困状態に置かれている子どもも少なくありません。こうした課題を少しでも改善していくため、多世代交流施設「さろん de 志氏我野」を活用し、諸事業を進めていきます。

活動内容概要

子ども・高齢者を主対象とした安らぎ・寛ぎの場の提供を目指した活動を展開しています。

1. カフェサロン

現代版井戸端会議の場の提供。30～50名/回参加。開催日拡大。

2. 介護予防プログラム（地域包括ケアの住民主体サービスに認定）

介護予防体操や手遊び、健康講座、健康相談など。10名/回参加。

3. 遊ぼう会

未就学児とその親が対象。子どもを遊ばせながら親同士の交流・親睦。5～10組/回参加。

4. 寺子屋

小中学生を対象とした学習支援。10～15名/回参加。

5. 子ども食堂

子ども（中学生以下）を対象とし安全・安心な食事を提供（80～120食/回）。

6. 高齢者食堂

一人暮らしの高齢者を対象とし安全・安心な食事を提供。30名/回参加。

協同した団体

- ◎生活協同組合コープみえ
四日市センター

地域の概要

羽津地区は、四日市市の北東部海沿いにあり、面積8.8km²、人口は約8,000世帯、18,000人。東側海岸部の埋立地（人工島）には石油化学コンビナート、西側には緑豊かな丘陵地、その間の平地北側には、広大な田園が残っています。

2012年、まちづくり組織の機能を担っていた地区社会福祉協議会が、まちづくり推進協議会（通称「まち協」）に改組・拡充し、まち協が主体となって「住みたくなるまち」づくりを進めています。

※「さろん de 志氏我野」運営委員会はまち協の中の一組織です。



他団体と協同することで発見したこと

高齢者食堂は、コープみえの調理済み食材を利用することで調理の手間が大幅に省け、スムーズなスタートが切れました。メニュー選定やスタッフの派遣など、コープみえの協力・支援の力は大きいです。介護予防でも地域の拠点病院や在宅介護支援センターの協力・支援を受けていますが、地区単独では難しいことも、外部の力を借りることによって、実現・発展させられることを改めて認識しました。他分野でもコープみえと協働・連携を進め、地域づくりを充実させていきたいです。

将来イメージ

子ども食堂は、調理を地区で行う予定でしたが、四日市羽津医療センターの主任調理師が調理を継続して担当する意思を表明しているため、当面は試行にとどめます。開催頻度は近い将来に月2回開催から、できれば毎週開催に増やします。高齢者食堂もできるだけ早期に月2回開催に持っていく予定です。

成果と教訓

成果

高齢者食堂は、毎回30名の方に限定し、温かく安全な食事を提供しています。継続して参加される方、介護予防利用者以外の方や、評判を聞き利用を希望する方も増加しており、家に閉じこもりがちな高齢者に出てきてもらい、相互交流をはかる本来の目的も達成されつつあります。コープみえとの協働事業が開始でき、軌道に乗ったことも大きな成果といえます。

教訓

高齢者食堂は利用人数に制限があるため、希望する全ての方が利用できない場合もあります。広く利用してもらう為、開催頻度を上げる必要性を認識しました。会場は和室で、座卓での食事ですが、脚や膝に障害を抱えている人も多く、和室用の椅子に腰かけて窮屈な姿勢での食事を余儀なくされています。

新しい厨房機器が入って大変楽になりましたが、コープみえから提供される調理済み食材は冷凍のため、解凍するための電子レンジが必要なことが判明しました。

大阪いずみ市民生活協同組合

活動名 | 地域の居場所づくりとして高齢者、学童、乳幼児の子育てを支援

活動のきっかけ

2017年度自治会のない団地での居場所づくりについて、協同団体他で協議を重ね、定期的なカフェの開催や、季節ごとのイベントを実施してきた。2018年度はその居場所づくりを充実させるため助成金を活用することとなった。

活動内容概要

UR団地集会室を拠点として、地域住民の居場所づくりが2017年度から始まった。2018年度は昨年実施してきた取り組みをより充実させるため、

1. 集会室の存在を知らせ、週1回の「りりんカフェ」、高齢者、子ども、親子の居場所への参加を増やすこと
2. 居場所を運営するボランティアを増やすこと
3. そのための企画、イベントを助成金で充実させることをめざし、多様な世代の関心にこたえる取り組みをすすめた。



協同した団体

- 堺市中区社会福祉協議会
- UR団地 都市機構
- 堺市中区地域包括センター
- 八田荘西校区民生委員

地域の概要

700世帯程度あるUR団地には自治会がなく、バラバラで他の自治会の催しに参加する住民もいた。一方で団地集会室はほとんど活用されない状況。自治会がないために地域のコミュニティについて話し合いの場もなかった。



他団体と協同することで発見したこと

- ①他の地域で行われている多様な企画や取り組みが参考になった。
- ②より広く情報を伝えることで、スタッフが増え企画の規模が拡大できた。

将来イメージ

- ・高齢者と子どもたちの交流がより活発になる居場所
- ・子どもたちが独居老人を訪ね、外出を呼びかける取り組み
- ・高齢者が子どもたちに遊びの文化、趣味、学習で対話とふれあいがすすむ
- ・気軽に参加できる定期的な居場所の充実



成果と教訓

成果

- ①人のつながり、方法など今後のイベントや取り組みを行う際の貴重な財産ができた。
 - ・協力いただける講師、団体、サポート役などつながりの広がり
 - ・企画をすすめる際のノウハウ
- ②企画講師やイベントの内容など、今までできなかった金額の企画ができ、高齢者や近隣住民の新たな参加が広がった。
 - ・2017年度のイベント参加 約250人 ⇒2018年度 約350人
 - ・団地住民ボランティア 3人 ⇒2018年度 6人
- ③これまで実施していた「学童の寺子屋」も学習支援を向上させることができた。

教訓

- ・団地へのチラシの全戸配布を行ったが、チラシより口コミの効果が高かった。集会室の居場所に来た人を増やし、口コミを広げることが大切。
- ・ボランティアが増えたことが、学習支援や趣味の企画への参加拡大につながった。
- ・人手が少ない中だったので、宣伝方法として、地域を広げた新聞折込などを活用してもよかった。
- ・団地周辺に乳幼児の子育て層が減少し、高齢者、学童の参加に比べ、乳幼児層はほとんど参加がなかった。
- ・自治会がないため助成金を受け取る口座を協議会で作ることでできず、2019年度の助成金は断念した。

ボランティア団体「ハートハース」

活動名 | 安心をはぐくむ居場所づくり

活動のきっかけ

不登校・ひきこもり支援の取り組みの中で、それぞれに活動していた「ハートハース」と奈良市社会福祉協議会が出会い「ひきこもり支援」の強化を目標とした活動の展開で合意した。

活動内容概要

ひきこもりの子どもを持つ家族を包括的に支援するプログラムで、家族の相談支援・当事者への訪問支援を全県的に展開する。元気を回復した若者、活動可能な若者には、様々な経験を積むことが出来る安心・安全な場「あなたのまんま」を開設している。

「居場所」での経験を経て、本人の希望に応じて市民生活協同組合ならコープの近隣店舗での中間的就労の体験が可能となっている。ハートハースと一緒に店舗に入りサポートし、きめ細かく他にはない就労支援を実施している。事業開始以来2名の若者がパートの雇用契約を結び就労中で、現在も1名が体験中である。

過去2年の事業実施期間中に養成した「ひきこもりサポーター」30名がすべての事業のサポートを行い、若者とともに活動している。家族への支援として、月1回の「親の会」も開催している。

協同した団体

- ◎市民生活協同組合ならコープ
- ◎奈良市社会福祉協議会
- ◎帝塚山大学心のケアセンター

地域の概要

大阪のベッドタウンである住宅地と旧来の地元の人々が暮らす土地柄である。豊かな世帯が比較的多いが、逆に安心して「ひきこまれる」状態の世帯が多い地域でもある。



他団体と協同することで発見したこと

「居場所」に集う若者は十人十色、まさにそれぞれの個性を持つかけがえのない存在である。現在の協働団体や多くの支援団体と協同することによってこそ、それぞれの若者の求める支援の形を実現することが可能であるということを実感している。人の数だけ支援が必要なのだということと、支援する人を増やしていくことが本人の真の自立を促す上で重要であり今後もこの点に留意していきたい。

将来イメージ

ひきこもりの支援はまだまだ充実しているとはいえない状況であり、支援と支援の狭間にいる当事者とそのご家族をそれぞれに適した支援に繋げる努力は継続して行われる必要がある。今後は様々な支援機関との連携をさらに拡大し、事業が継続して行えるよう経済的な基盤を整える仕掛けを若者ととともに運営していきたい。

成果と教訓

成果

当初3人の参加者でスタートした居場所の参加者が常時12人程度の参加となり、多彩なプログラムが展開できるようになっている。年に数回、若者の就労へのステップとして地域の人々を対象にカフェを開催しているが、4回目のカフェの来客数は40名と最多となった。月1回の親の会への参加者は、毎回20名程度に増加し、のべ人数が240名となっており、リピーターも増加傾向にある。

就労支援については、ならコープの協力のもと、開始以来継続的に雇用されている若者が2名おり、今後も次のステップを目指して暖かく見守られている。来所相談が全29件となっており、相談支援件数も増加傾向にある。

サポーターの研修も全4回開催し、うち1回は広く一般に向けて、ひきこもり問題の第一人者と言われている筑波大学大学院の斎藤環教授を奈良市中郡公民館にお迎えし、午前161名、午後60名の参加者を集めた。

教訓

様々な若者・家族との関わりの中で、本人やご家族の想いに寄り添うことの難しさを実感した一年だった。ひきこもっている又はひきこもっていた人は圧倒的に生活経験が不足しており、それを埋めていく多様な方法を考えていく必要を感じている。そのための根底となるのが、研修のテーマであった「対話を続ける」ということであり、押し付けや説得ではない「対話」の在り方を求めて活動を継続していかなければいけないと思った。

倉敷医療生活協同組合

活動名 | 水島地域での小さな助け合い活動

活動のきっかけ

超高齢社会・孤立化・長期化と言われる社会状況のもと、この地で暮らし続けたいと希望されている方たちの「ちょっと困った」を解決できるしくみがほしい、との思いから活動を開始した。

活動内容概要

倉敷医療生協と倉敷市社協、NPO法人、公益財団、研究機関がそれぞれの得意分野を活かして、支え合い事業のしくみづくりに取り組む。

1. 水島地域で高齢者のくらし向きにアンケート（1,000人余）に取り組み、高齢者の困りごとを明らかにした。
2. アンケート結果から、水島千鳥町をエリアとする支え合い事業とすることとした。
3. 事業化に向け、他法人の見学・研修、サポーター養成講座を開催。
4. サポーターを「ちょこっと隊」、利用者を「ありが隊」と命名し、「ちどり助け愛たい」として15分150円の有償ボランティアによる支え合い事業をスタートした。

協同した団体

- 倉敷市社会福祉協議会
- NPO法人 かけはし
- 倉敷市立短期大学 唐澤克樹教室
- (公財)水島地域環境再生財団

地域の概要

戦争中、国策により戦闘機工場が建設され、労働力として朝鮮半島からの徴用者、戦後は水島コンビナートの操業により大量の労働者の流入によりできた街。高齢化（40～60%）が激しく、かつ人間関係が希薄な土地柄。



他団体と協同することで発見したこと

アンケートに広く取り組むことができた。そのことで実際の困りごとの内容が明らかになり、活動趣旨を多くの方に知ってもらうことができた。

地域で地道に活動しておられる方を発見することができ、活動の趣旨に賛同いただき、活動に参加する方が広がった。人つながりによる参加者（人財）の発見、広がり。

将来イメージ

「ちどり助け愛たい」の事業を定着させること。「〇〇助け愛たい」として、他の地域にも広げていくこと。「ちょっと困った」を気軽に相談でき、地域での見守り、助け合いが暮らしの中でごく普通に行われるまちにしていきたい。

成果と教訓

成果

限られた地域だが、住民に依拠した支え合い事業の土台ができたことがとても大きい。地域の民生委員、愛育委員の方たち、サロン活動の代表者との接点があった。

到達点は次のとおり。

アンケート集約：1,118人
協力サロン：15ヶ所
サポーター養成：16人
利用者登録：8人
利用者延数：93人（2月末）

教訓

年齢に関係なく、「人の役に立ちたい」「何か手助けをしたい」と思っている方、地道に活動している方がおられることがわかった。

養成講座や研修見学がサポーター活動の土台として必要であり、活動参加への確信につながっていく。

サポーターや地域包括支援センターを通じての依頼が多いことから、やはり人と人とのつながり、信頼関係が事業の中心であることがわかった。



鹿児島県生活協同組合連合会

活動名 | 鹿児島県における住民が主人公の地域づくりの実践交流の場とネットワークづくり

活動のきっかけ

3回目の企画となります。2016年度は住民本位の『地域包括ケア』とは何かを問題提起しました。2017年度は「鹿児島県」での「住民が主役」の生活支援の在り方と紹介の場を作りました。既に認知された取り組みになっています。今回は更に実行委員団体も増やし、規模も大きくし、県内で確たる実践交流の場づくりをめざしました。

活動内容概要

- ・平成30年10月27日(土)鹿児島市内施設で、豊中市社会福祉協議会 福祉推進室長 勝部 麗子さんに基調報告をお願いし、『ひとりぽっちをつくらない』(第3回みんなでつくる地域包括ケア学習交流会)を開催しました。
- ・県内の街づくりの実践報告として、鹿屋市の『川東見守り隊を中心とした地域ぐるみの見守り活動について』、西之表市『地域愛・支え合い・ふれあいで甦る集落再生』の報告と相互の意見交換を行いました。
- ・生協組合員の他、地域のまちづくりを進める民生委員など全体で約350名の参加があり、非常に好評を博しました。
- ・4回の実行委員会を行った。会では企画協議のほか、団体間の活動紹介など情報交換を行いながら進めました。



協同した団体

- 鹿児島県社会福祉協議会
- J A鹿児島中央会
- 曾於市福祉課など12団体にて
実行委員会を結成

地域の概要

75歳以上高齢者の比率が高く(全国7位)、高齢者の単身世帯(全国2位)、高齢者夫婦世帯が多い(全国5位)という特徴があります。また鹿児島県は離島数、離島人口が全国1位という離島の県です。しかし伝統的な相互扶助組織もありますし、住民参加の地域づくりも活発です。



他団体と協同することで発見したこと

- 組合員レベルで生協の組合員活動とは違った『住民』活動について知ること、生協にとっての「地域づくり」を感じ、考える機会となりました。
- 地域の中では様々な「暮らし」に関わる問題にあふれている事。それに果敢にアプローチする人々の存在や役割を知る機会となりました。
- 同じ『住民』が主人公の生協についても、同じ地域づくりを行うパートナーとして認知してもらえること。また人と人の組織としての生協への期待が大きいことを発見しました。
- このような機会が無ければ、生協関係者が生協の関係者や行政の関係者とフラットに地域づくりの議論ができるようなことは想像も出来なかったと思います。

将来イメージ

- (期待されすぎても困るのですが)生協が地域づくりを担う一翼だという認識は広げたいと思います。
- 住民相互の地域づくりを充実させる事で、政治の方向や行政の施策の充実に結び付けたいと思います。
- 手弁当でフラットな関係で、責任を分担し、会を企画運営したいと思っています。(ハードルは高い)

成果と教訓

成果

- 実行委員会は今回からいちき串木野市地域包括支援センター、公益社団法人 鹿児島県社会福祉士会、J A鹿児島中央会の3団体が加わり12団体になったこと。
- 参加者は第2回の約250名から約100名増えて350名に広がりました。
- 参加者の層も事業者・職員の参加から「住民」の参加が増えています。実践報告が身近で、ためになっています。
- 県や鹿児島市の幹部参加など、行政に確実に認知が広がっています。また行政担当者と実行委員会にて席を同じくすることで、関係性が高まり、提言や提案を反映するようになっていきます。また生協の代表が行政の生活支援体制整備の委員になることが増えています。
- 実行委員会に助成により離島からの実行委員も参加もでき、地域の様子などがより密に交流されました。

教訓

- 3回目の企画であり認知された企画として層を広げることが出来ました。継続が重要。
- 思い切って土曜に開催し、著名な講師を招いた企画としました。職員の立場の参加は減りましたが、「住民」「関心のある」層の参加が増えました。民生委員などの参加が多く好評でした。
- 学識者を中心に12団体で実行委員会を結成し準備しましたが、団体同士の関係性がより密になりました。実行委員としたことで行政との関係を近くすることができました。

特定非営利活動法人 フードバンクふじのくに

活動名 | 協同で命と環境を守るフードバンク活動

活動のきっかけ

当団体は、処分せざるを得ない食べ物を有効活用することにより、食料を無駄にせず、食を分かち合い、命や人権を守るという目標を掲げ、10を超える団体が1つの連合体となり、2014年5月20日よりフードバンク活動を開始いたしました。そして、同年10月にNPO法人の認証を受け、2017年4月からは、静岡県より社会的に公益性が高い団体として認知され、「認定NPO法人」として活動しています。

活動内容概要

毎年2回、夏季・冬季のフードドライブにおいて県内17店舗のユーコープより、お客様及び店舗からの食品の提供を受けました。それに加え、おうちコープで発生したキャンセル品などを、静岡センターほか、6拠点を通じ、毎月2～4回のペースで提供いただいています。当団体では、ユーコープを含め、他の協力団体や個人より寄贈を受けた食品を、各市町の福祉課や社会福祉協議会を通し、年間約3,000件の食料支援をしています。



協同した団体

◎生活協同組合ユーコープ

地域の概要

静岡県下でフードバンクの食糧支援を受けられる連携拠点は83カ所あり、毎年増えている状況です。これは地域でのフードバンクの認知と信頼、需要の増加を示しています。

また、食料支援先として、独居の高齢者やひとり親世帯に加え、こども食堂や学習支援を行っている団体などへの支援も増えています。



他団体と協同することで発見したこと

協同していただいたユーコープの食品管理や事務処理の正確性・スピード感には、NPOとして学ぶべきものが多数ありました。また、ドライブ時にユーコープのお客様よりお寄せいただく食品量も年々増加し、一般の方のフードバンクへの関心の高まりを感じています。

将来イメージ

フードバンク活動も5年目を迎え、フードドライブ開催時には、静岡県下の231カ所にフードボックスを設置するなど、各方面での広がりを見せています。今後はさらに、フードバンクを地域の仕組みとして定着させ、食を通じて人の縁を結び、お互いが助け合う、困った時にはお互い様な社会を目指していきます。

成果と教訓

成果

本年度は、静岡・富士のおうちコープ宅配センターに加え、伊豆・御殿場・浜松北・浜松南・牧之原の各センターからも食品提供を受け、年間で約3トンの食品をいただきました。

夏季・冬季フードドライブにおいても、ユーコープ17店舗より合計で1.6トンの提供をいただき、2018年度は提供食品重量が約4.6トンとなり、昨年度より15パーセントの増加となりました。

フードバンクふじのくに全体では、食料支援の件数は約3,000件。支援食料の重量は約60トンとなっています。それに伴い、食品の仕分けなどへのボランティアの参加も増え、年間で延べ200人の方々にご協力をいただきました。

教訓

多数の食品を募っているフードバンク事業ですが、集まる食品の種類が多様・多様なため、生活困窮者への食料支援に向かない食品も増える傾向にあります。今後、業務の効率化を考えると、受け取れる食品を明確化するなどの工夫が必要になると感じています。

フードバンク奈良

活動名 | フードバンク事業

活動のきっかけ

全国的に広がりつつあるフードバンクが奈良県内には無く、その必要性を感じたことも食堂関係者が中心となり、フードバンクを設立しました。

貧困の現場を見聞きする一方、たくさんの食品が十分に食べられるのに捨てられている現実があり、それらの食品を必要とする人に提供する仕組みを奈良県内につくることを目指しています。

活動内容概要

1. 2018年9月にならコープが奈良市内の店舗跡を地域の交流拠点として改装し、その一角をフードバンク奈良の食品保管と活動拠点として無償で貸していただき、食品の仕分けや配送作業を開始しました。
2. 県内外の食品加工事業者や生産者から食品の寄付を受けました。
3. 資材や機材をノウハウとともに貸出し、ならコープ店舗においてフードドライブを実施し寄付を受けました。県内自治体等にも実施していただき、6つの自治体や多くの団体・個人から食品の寄付を受けました。
4. 9月からは隔週で食品の仕分けや配送作業を実施し、ボランティアは毎回10名ほど参加されるようになりました。
5. 食品ロスの解消に向けた啓発活動を行いました。
6. 11月3日に「フードバンク奈良活動報告会」をならコープと共催で実施し63名が参加しました。「フードバンク奈良通信」やパンフレット、呼びかけ用チラシやのぼりを作成しました。ならコープの機関誌やチラシ等に掲載していただきました。



協同した団体

- 奈良県生活協同組合連合会
- 市民生活協同組合ならコープ

地域の概要

- ・奈良県内では2015年に県内初の子ども食堂ができ、その後相次いでこども食堂ができました。奈良県生協連が2016年5月に県内初めてのこども食堂交流会を開催し、奈良県社協とともに事務局を担い奈良こども食堂ネットワークが2017年8月に設立されました。
- ・それぞれの子ども食堂の持つ課題解決に向け交流を深め、現在44団体が登録されていますが、中には食品の寄付が多く寄せられる事例もでき、食品の需給調整や融通し合う組織が求められていました。奈良の生協、県はじめ県内自治体も、子どもの貧困対策やフードロス削減には高い関心を寄せています。



他団体と協同することで発見したこと

8月までは、自治体の環境イベントや各団体で実施するフードドライブによる食品が頼りでしたが、9月から共同購入のキャンセル品が定期的に提供され、元店舗のバックヤードを作業場と食品保管場所に無償で提供していただくことで、フードバンク奈良が扱える食品の量が大幅に多くなりました。そのことにより、支援する団体数が多くなり2019年3月現在51団体に4.5トン（2018年1月からの累積5.7トン）の食品を提供しました。

将来イメージ

- 広報啓発活動を通じ、生協だけでなく広く県民や企業に、食品ロス解消についての関心を高めるとともに、食品ロス解消に向けた行動を促していきます。フードバンク活動についての理解を促進し、地域で暮らす様々な困難や生活上の課題を抱えている人に対する支援の輪が広がり、ともに支え合う温かい地域づくりを目指します。
- 早い段階でのNPO法人化をめざし、安定した事務局体制にするとともに、企業や団体の寄付や賛助会員を増やし、自立した活動をめざしていきます。

成果と教訓

成果

- 農林水産省近畿農政局、県農林部、県社協や市町社協ともつながりが広がりました。その中で、生活保護を担当する課や市社協等を通じて本当に支援が必要な方の状況もわかりつつあります。また役員が関係する団体を通じ、食品を寄付していただける団体も増えました。
- 奈良市第3次食育推進計画(2019年4月～2か年計画)に「食品ロス削減・生活困窮者への食料支援」の団体として位置付けられました。
- お届けする団体(登録団体)が広がり、合計51団体となりました。

教訓

- 現在、ならコープからの共同購入キャンセル食品をお届けしていますが、現在の仕組みではどのくらいの量が届くのか前もってはわかりません。食品を希望する団体には、原則的に作業日に取りに来ていただくルールにしていますが、お渡しする当日に渡す食品がほとんどないという事象が発生しました。消費・賞味期限を管理しながら在庫をたぐわえることなど改善策を検討していかなければなりません。
- 期日に取りに行けない団体や車を持たない団体に、誰がどのように届けるのか、事務局の労力や費用負担についても、お互いが持続可能にするためのルールや仕組みづくりが課題となっています。特に、生活困窮者を支援する団体からは緊急の受け取り希望をいただくケースが増えてきており、支援する団体数が増えるほど、食品を渡す優先度や頻度の公平化、食品ロスなど食品の供給元となる企業を開拓していく必要があります。

エフコープ生活協同組合

活動名 「平成29年7月九州北部豪雨」災害により設けられた応急仮設住宅入居者の心身の健康づくり

活動のきっかけ

「平成29年7月九州北部豪雨」災害の発生に伴い、応急仮設住宅が建設され、自治会が組織されたこと。

活動内容概要

東日本大震災・福島第一原発事故の風化防止もあわせて意図し、

1. 応急仮設住宅でのコミュニティづくりを目的とした集会所での「夕食会」の開催（主に、東北地方の郷土料理もしくは同地方の産品を食材として準備）
2. 災害経験の継承も含めた被災者同士の交流活動（福岡県から福島県への訪問および福島県から福岡県への訪問）



協同した団体

- 杷木小学校応急仮設住宅自治会
- 旧宝珠山小学校運動場跡
応急仮設住宅自治会

地域の概要

福岡県の中南東部に位置し、大分県と隣接する地域。標高600～900メートル級の山地と、山々に囲まれた盆地。「平成29年7月九州北部豪雨」では、本県内では戦後最悪ともいわれる甚大な被害が発生し、被災された方々の生活再建に向けた、さまざまな課題の解決が急務となっています。



他団体と協同することで発見したこと

応急仮設住宅自治会役員の方々は被災前の居住地でも自治組織の役員などを担われており、意思決定やとりまとめなどがスムーズにすすみ円滑に活動ができたほか、多くの住民に生協組織や活動・事業についての理解を広げることができました。

また、他生協・団体やお取引先・当組合の組合員による被災地視察の際、関係者以外では難しい「受け入れ・同行案内対応」（計22回・受け入れ数183名）などを担っていただいたほか、「平成30年7月豪雨（西日本豪雨）」の発生にあたり、当組合役職員と自治会役員のみなさまが協同して愛媛県宇和島市内の被災地に赴き、活動しました。

将来イメージ

当該地域の応急仮設住宅は、2019年8月をもって全世帯の退去が予定されており、上記活動については終了しますが、地域の主要産業である農林業の復興に向け、農地再生やイベント開催などを通じた産物のPR活動・生協宅配事業での商品取り扱いなどには、引き続きとりくみたいと考えています。

また、行政からは、災害を機にいっそう急速にすすむ高齢化や買い物難民対策・特産品の開発についての提案もいただいております。対応検討を行うこととしています。

成果と教訓

成果

- 応急仮設住宅集会所での夕食会の開催（計69回開催・のべ5,525食を提供）を通じた住民のみなさまのコミュニティの場の提供
- 当組合の組合員による、ボランティア活動組織の結成（21名が登録）
- 本活動に関する対外報道（計161回の報道実績 ※新聞85回・テレビ39回ほか）
- 当該地域の組合員の増加（発災前の組合員数4,522名→4,748名 ※当該地域の世帯数：発災前20,006世帯→20,115世帯 世帯数は+109世帯に対し、組合員数は+226名）
- 行政などからの表彰（農林水産省・福岡県庁）や、広報物での紹介（内閣府・福岡県庁）

教訓

活動の継続により、自治会役員のほか、住民のみなさまや当該地域の行政や社会福祉協議会など他団体の関係者様とも「顔の見える」関係が築け、災害復興に関する活動以外の面についても、お声をかけいただけるようになりました。また、福島県内の災害公営住宅の視察については、本県内でも同様の住宅の建設が予定されていることもあり、特に、課題や解決策の交流など、自治会役員のみなさまのほか当組合としても有意義でした。

認定特定非営利活動法人 まちぽっと

活動名 | 高齢者等「住宅確保要配慮者」に対する居住・見守り支援の担い手・ネットワークづくり

活動のきっかけ

福祉のまちづくりの一環として、空き家・空き室を高齢者などの居場所・住まいに活用する調査研究を行ってきたなかで、生活クラブ生協が高齢者・障がい者などの居住支援・見守り支援の事業に取り組むこととなり、事業化にあたって法制度、居住支援に関連する団体のリサーチへの協力を求められた。

活動内容概要

1. 居住支援の法制度とその運用状況について国や自治体の関係機関にヒアリングを行った。
2. 生活クラブ生協が東京都指定の居住支援法人として居住支援事業（賃貸住宅入居のコーディネート、見守り・生活支援・相談など）を運営するうえで必要となる業務について、業務に精通している市民団体、不動産業者等、20団体にヒアリングを行った。
3. 居住支援事業では、地域で見守り・生活支援・相談、受け入れ住居の確保などに協働して取り組める市民団体との連携が必要となるため、その担い手となる可能性のある市民団体などを対象に、法制度と運用の内容、居住支援のノウハウなどについて専門家による学習会を実施した。

協同した団体

- 生活クラブ生活協同組合（東京）
- アビリティクラブたすけあい
- 市民政策調査会

地域の概要

2017年10月改正セーフティネット法が施行され、高齢単身者や生活困窮者、障がい者などの住居の確保が困難な人々に、市民団体などが賃貸住宅を提供して居住支援に取り組むことができるようになったが、地域の市民団体等にはほとんど知られていないという状況であった。



他団体と協同することで発見したこと

アビリティクラブたすけあい関係のワーカーズコレクティブなどでは、高齢者、障がい者等への配食サービスで、届けたときに体調や困りごとを聞いたりして、実質的に見守りをしていることがヒアリングによって明らかになった。

組合員を対象にした生活クラブ生協の居住相談等で集積された情報から、居住困難者を受け入れる賃貸住宅として活用できる空き家・空き室が相当数あることがわかった。

将来イメージ

生活クラブ生協の居住支援事業の賃貸住宅入居のコーディネート、受け入れ賃貸住宅による空き家活用について協同する。

成果と教訓

成果

生活クラブ生協が居住支援法人の指定（2018年9月）を受け、2019年4月から居住支援事業を開始する予定だったが、この活動により事業運営についてのリサーチおよび地域の居住支援関連団体とのネットワークが進み、2019年1月から事業を開始することができた。

今回ヒアリングした20団体のうち、地域で居場所カフェ、配食サービス、生活支援サービスなどを行っているワーカーズ、NPOなどが居住支援事業に関心をもち、少なくとも10団体がこの分野で生活クラブ生協の居住支援法人と協同して、新たな地域たすけあいの事業展開を考えるようになってきている。

教訓

居住支援の見守りにはアルソックなどの企業が参入し、電話やセンサーでの見守り対応をしていることに対し、アビリティクラブたすけあい関係のワーカーズコレクティブなどでは、配食サービスなどで対面して、実質的な見守りサービスを無償で行っている。対面型の見守りサービスを居住支援として事業化する上で参考になっている。

特定非営利活動法人 フードバンク信州

活動名 | 本部拠点の強化

活動のきっかけ

長野県においても生活困窮者は増加傾向をたどっており社会的な課題となっている一方で、まだ食べられる食品が流通の過程や家庭生活の中で廃棄されるいわゆる食品ロスが問題となっている。無駄に捨てられる可能性のある食料の寄贈を受け、食料を必要としている人に無償で提供する活動を広げ、生活困窮者を地域で支え合うしくみを構築するために、2016年2月にNPO法人フードバンク信州を設立した。

活動内容概要

1. 食料支援活動

企業や家庭から食品の寄贈を受け、生活困窮者や生活課題を抱える子ども等に食品を届け、生活の自立支援に役立てる。

2. フードドライブの実施

一般住民に呼びかけ、家庭で眠っている食品を集めるとともに、食品ロスの削減と生活困窮者支援についての理解を広げる。

3. 担い手養成講座の開催

フードバンク活動の啓発・普及をはかり活動を支える人材を確保するための講座を開講する。

4. こども応援キャンペーン

長期休み中給食がないために食事の負担が増え、食料の提供を希望する家庭及び子どもの居場所への食料の提供を行う。



協同した団体

- ◎長野県生活協同組合連合会
- ◎長野県農協中央会
- ◎長野県労働者福祉協議会

地域の概要

7人に1人が相対的な貧困といわれる中、生活困窮者への自立支援と子どもの居場所での食事提供のために、食料支援が求められている。



他団体と協同することで発見したこと

家庭にある食品を持ち寄るフードドライブ活動に地域の多くの個人や団体が取り組めることがわかった。

将来イメージ

現在4か所の地域拠点をさらに増やしていきたい。

成果と教訓

成果

2017年度は延べ91会場だったフードドライブが、120会場に増えた。

これまでの行政や労働組合、ライオンズクラブに加え、企業や商工会議所女性会、JA婦人協議会などに広がった。

教訓

食料の持込や受取りに来る来客用の駐車場の確保。

いばらきコープ生活協同組合

活動名 | おたがいさま水戸（生活支援を行う任意団体の設立）

活動のきっかけ

茨城県内3生協が連携し「新しい助け合いの組織」立上げに向けた会議を開始。NPO法人セカンドリーグが合流して、水戸市や水戸市社会福祉協議会の協力を得ながら水戸市の地域包括ケアシステムの一翼を担う「生活支援」を行う任意団体設立を決定しました。

活動内容概要

生活支援を行う有償ボランティアの組織

- ・家事支援：買い物、掃除、洗濯、食事づくり、縫い物 他
- ・介助支援：外出、通院、買い物同行、話し相手、ゴミ出し 他
- ・育児支援：乳幼児・子どもの世話、保育園の送り迎え、託児、産前産後手伝い 他
- ・その他：草取り、薬取り、電球交換、他

協同した団体

- 生活協同組合パルシステム茨城栃木
- 茨城保健生活協同組合
- NPO法人セカンドリーグ茨城

地域の概要

水戸市



他団体と協同することで発見したこと

生協以外の皆さんと協力することで、ボランティアの確保や組織の周知が広まりました。

NPO法人セカンドリーグからはボランティア人材の確保、水戸市社会福祉協議会からは活動保険の紹介、ボランティア研修を開催していただきました。また、同じ生活支援を行うNPO法人ナルク水戸からは役員を選出いただき、活動内容の交流、情報交換ができました。

将来イメージ

- JAをはじめとする地域諸団体への参加要請
- 水戸市を基盤とした他市町村への展開

成果と教訓

成果

「おたがいさま水戸」1月現在

- 役員13名（コーディネーター、いばらきコープ、パルシステム、茨城保健生協、茨城県生協連、NPO法人セカンドリーグ水戸、NPO法人ナルク水戸）
 - オブザーバー 水戸市社会福祉協議会
 - コーディネーター 2名
 - 有償ボランティア 44名
- 活動時間201時間 活動日数109日
利用件数57件 利用者37名（12月現在）

教訓

- 地域の中にはさまざまな「困ったこと」があり、「困っている方」がいること
- 市の総合事業との仕組みのすり合わせ

生活協同組合コープしが

活動名 | 生協と社協による住民の暮らしを支えるプロジェクトⅢ (実践編)

活動のきっかけ

10年先の状況を見越して、これまで高島市で取り組まれてきた「住民主体のまちづくり」地域まるごとでの見守り活動を基盤に、暮らしを支える協同づくりをミッションとする生協と地域ネットワークを有する社協がお互いの資源を持ち寄り、連携することで2016年度に本助成を受けて実施したプロジェクト会議で、明らかにした地域づくりをすすめるための課題に取り組む3年目の活動です。

活動内容概要

地域で活動する住民、生協組合員とコープしが、高島市社協の職員が地域の課題と具体的な取り組みについて2回にわたり協議するプロジェクト会議を開催しました。プロジェクト会議の全行程に行政職員（地域包括支援課、市民協働課）の方も参加いただき、ワークショップ形式にて、それぞれの視点で地域の実態や課題について共有し、地域を支える取り組みの実践に向けて、地域と生協の資源など、お互いの強みについて共有をすすめました。

2回のプロジェクト会議の集大成として、協同の取り組み事例の掘り起こし、居場所づくりの整備、組合員活動を通じたつながりづくり、見守り活動・見守り啓発資材作成などの実践課題を整理し、内外に発信することを目的としたフォーラムで報告しました。



協同した団体

- ◎社会福祉法人高島市社会福祉協議会
- ◎高島市住民福祉協議会

地域の概要

滋賀県高島市は人口減少・少子高齢化、単身世帯の増加が進行しており、過疎高齢化によるコミュニティ基盤の脆弱化が大きな課題となっています。10年先、20年先の地域社会を、誰もが安心して暮らしていけるように、多様な主体が連携・協働した、地域生活支援体制の構築が急務となっています。



他団体と協同することで発見したこと

個別配送が増加し地域での協同づくりに課題をもっている生協と、単身世帯の増加や孤立といった地域の問題解決に向けて生協と社協が協働することで、人のつながりが生まれてきました。組合員＝地域住民であり、組合員による主体的な活動が地域で広がれば、活動を通じてつながりが生まれ、主体的に地域の課題を自分たちの困りごととして捉え、人のつながりで解決することができます。誰もが安心して暮らせる地域社会（共生社会）を目指して、地域住民の暮らしを支えるという点では共通することが多く、協同することの意義を実感しました。

将来イメージ

3年間の取り組みを通じてお互いの理解が深まり、協働する意義をもつことができました。

各組織内で他の団体のもつ「強み」の情報提供・共有を図り、将来に向け福祉の協働づくりを共に推進していきたいと思います。またこのことを地域住民や組合員に知らしめることでより地域の課題を自分たちの困りごとと考え、「私のできるコト」として協同づくりに一歩踏み出す方が増えるのではないのでしょうか。他の地域でも行政や他団体と協働する機会が生まれ、地域における福祉の協働づくりがより前進することと考えます。

成果と教訓

成果

地域住民、社協、行政、生協の4者が顔の見える関係を築くことができ、さらに地域課題を共有することができました。

福祉的視点でみることで生協の既存の事業や、組合員活動が暮らしづくり、地域貢献に繋がっていることを再認識することができました。組合員並びに地域住民はじめ、社協、行政からの参加者にそのことを認識していただく機会になりました。

フォーラムでは生協と社協の協働づくりという先進的な取り組みとして発信することができました。また県内各エリアに於いても社協との関係性を一歩すすめた活動のきっかけが生まれています。

教訓

行政や地域では、生協を営利企業と同列にみる傾向があり、農協などの他の協同組合に比べ、生協の理念などへの理解はあまりありませんでした。一方で社協の取り組みは地域住民である生協組合員にはよく伝わっていませんでした。今年の特徴は社協職員が生協の組合員活動に参加する場面や、組合員活動の場で社協職員や住民福祉の担い手から、地域の課題やその取り組みについて学ぶ機会を多くつくることができました。このことによりお互いの事業や活動の目的への理解が深まり、共感が生まれました。

誰もが安心して暮らせる地域社会にしたいという共通の目的を持っている点では、協働していくことで住民同士の新たなつながりや広がりが生まれます。

宝塚23万人の防災キャンプ実行委員会

活動名 | 宝塚23万人の防災キャンプ2018 WITH コミュニティ末広

活動のきっかけ

「宝塚の街にもっと人が関わっていければ、街はもっと活性化されていくのではないだろうか」「自分たちが暮らしている街に何か役に立てないだろうか」という共通の想いを持つ団体で実行委員会が形成されました。

活動内容概要

実行委員会メンバーと地域のコミュニティが会議体を設け、企画、準備、進行状況を確認しながら進めていきました。

事業当日は、参加者のお互いを知るオリエンテーションに始まり、段ボールのベッド・仕切部屋など避難所生活に便利な防災グッズの紹介、普段からできるローリングストック講義や非常食クッキング、子どもの参加が多かった火の扱いの練習、プライバシーが確保できない状況での就寝体験をしていただきました。

2日目は遊びの時間を設けた後に協同で事業を実施した地域コミュニティ主催の防災訓練に参加し、ペット同行訓練、簡易担架の組み立て、AEDの使用、炊き出し試食の体験を参加者9家族（大人11人、子ども14人）とスタッフ共に被災者という前提で行いました。

協同した団体

- こむ1会
- コミュニティ末広
- 生活協同組合コープこうべ
- FMたからづか
- 宝塚青年会議所
- 宝塚商工会議所青年部

地域の概要

宝塚市は1995年の阪神淡路大震災で甚大な被害を受けました。年月が経ち、意識が薄れつつありますが、各地で災害が頻発していたり、南海トラフ巨大地震が予想されていたりと、当事者意識で万が一の備えは必要です。また例年行われていた観光花火大会が中止になり、それに代わる街の活性の一助を目的として活動を開始しました。



他団体と協同することで発見したこと

それぞれの得意分野を生かし、実行委員会の開催や運営、会場や設備の予約・調整、当日の進行、オリエンテーションや学びの時間などの交流、助成金の取得、食材資材の調達を行いました。さまざまな団体が協力し合って開催できたことが先進的事例としても意味がありました。

将来イメージ

「宝塚23万人の防災キャンプ」が宝塚市内に広がり、各地域のコミュニティで自主開催され、防災キャンプを通じて地域と人とのつながりを作り、自分のまちを自分たちが守るという市民意識と活力を育てることで、宝塚のまちの活性化につなげたいと考えています。

成果と教訓

成果

避難訓練、防災訓練の中でも1泊2日で避難生活を体験する事は非常に価値があると思います。

参加者からは、「これらを全てボランティアで開催していることに驚いた」「スムーズな進行でよかった」「貴重な体験だった」という感想が上がり、子どもたちからも「楽しかった」「包丁なしでご飯を作るのが面白かった」など、不便・不自由な中에서도楽しく過ごせた感想が寄せられました。

また、地域コミュニティを中心に募集をしたので、地域の方々特に隣近所との助け合いの重要性に改めて気づいていただけた事は良かったと思います。

教訓

「2日目の防災訓練は子どもには参加しにくい構成だった」という声もありましたが、防災という観点からは必要不可欠な内容であり、参加者への案内の周知が出来ていなかった所もありました。このような意見を踏まえ、今後は参加者全員に興味、関心を持っていただける内容の工夫を考えます。

特定非営利活動法人 フードバンク八王子えがお

活動名 | 食に困る方々を地域で支えるフードドライブ活動の展開

活動のきっかけ

「えがお」とコープとの関わりは、コープみらい地域クラブ「えがおのおすそわけ」のフードドライブで始まった。子どもの貧困、ひとり親世帯の生活を学ぶ中から、“食に困る方々を地域で支える”フードバンク活動を2016年3月に立ち上げ、その過程でコープみらいの支えのもと、地域クラブの協力、コープ共済連の助成を受け、NPO法人としてフードバンク事業の定着化をはかって現在に至った。

活動内容概要

いま日本国内には約80のフードバンクがある。食に困った方々に食品を提供する点では共通だが、食品をどのように集めるかでは違いがある。

「えがお」が活動エリアとしている人口56万人都市八王子にも“ひとり親”世帯、高齢者世帯”等、食に困る住民が数多く居住している。同じ地域に住むものがそういった現実を理解し、お互いに支えあい、いたわりあいの地域づくりのため協力、協働する活動を現在4生協と共に進めている。

具体的には、フードドライブ（食品寄付呼びかけ活動）で集められた食品を、「えがお」を通して生活困窮家庭に月1回届けるほか、市役所の相談窓口を通して、あるいは、市内13ヶ所ある子ども食堂や児童養護施設等へも要請に応じて届ける活動が展開されている。



協同した団体

- コープみらい地域クラブ
「えがおのおすそわけ」
- 東都生活協同組合
- 自然派くらぶ生活協同組合
- 生活協同組合パルシステム東京

地域の概要

食に困る住民の状況はますます厳しさを増している。単なる食料支援だけでなく、小中学校の長期休暇期間、学校給食に代わる子どもの健康を守る活動への関わり的重要性も出てきている。



他団体と協同することで発見したこと

理解と運動、協力の広がりだけでなく、“食をはじめ生活に困ったときには支えあう”いたわりの地域づくりへの協働の深化をめざし、知恵を出し合うパートナーとしての輪の広がりを見いだす可能性をつかんだこと。

将来イメージ

コープはこの1年間で4生協との関わりに発展し、2,000kgを越える食品を供給するという、「えがお」事業の最大の協力者になった。

さらに今年度、小中学校の長期休暇期間、バランスがとれた日々の食事がとれなくなるのではと懸念されるひとり親世帯の子どもたちに、ゆうパック宅配で食糧支援を行う「えがお子ども応援プロジェクト」に共感して、一口200円の「子ども応援資金」を組合員に呼びかけ、622口、12万円余を集めて「えがお」に託されたある生協の活動から教えられ、通常のフードドライブ協力とともに、経済的に困窮する子どもの健康を守る「夏・冬休みの子ども応援プロジェクト」を市民に呼びかけていく《生協とえがおの協働事業》へ深化させて行きたいと考えた。

成果と教訓

成果

必要な方々にお届けする食品の大部分が生協組合員や生協店舗の利用者からいただいていることが、「えがお」がお預かりしている食品の質の高さにつながっている。

「えがお」が生活に困窮する方々に接するときに、アルファーマ等の災害用非常食等ではなく、私たちが日常的に食する食品の“おすそわけ”というスタイルをつくりあげるのに、生協との協働が大きな力添えになった。

また、宅配デリ活動の配達員さんの手を通してフードドライブへの道を切り開けたことは、店舗から遠く離れたところに住む組合員や高齢の組合員のフードドライブへの参加に道を開くことを教えてくれた。

コープみらいの地域クラブで1月に学習会、3月には自然派くらぶ生協組合員を対象に学習会と2回の学習会を開き、「えがお」の活動を計75名の方々に直接話すことができたことは大きな成果といえる。

教訓

学習会でのアンケートをみて、心ある方々が多く存在していること、何をどうしたらよいか分らなかったが、生協を通して「えがお」やフードドライブを知り、自分の思いを活かす道を見つけることができたという感想がいくつもあったことから、より一層住民に広報と参加の道を広めて行く必要性和展望を知ることができた。

生活協同組合コープこうべ

活動名 | コープは～とらんどハイム本山 秋まつり

活動のきっかけ

ハイムを舞台に地域の様々な人たちがつながり、もっと住み続けたい地域になれば、と考え、2018年3月に春まつりを開催。地域にたくさんのつながりを構築できたため、同年11月に秋まつりを開催することとなりました。(ろっこう医療生協にじいろクリニックが春まつりを主催されることとなったため、コープこうべは秋まつりのみの主催に変更。)

活動内容概要

多世代交流を図る地域団体、小・中・高校生、医療生協、障がい者就労施設、ハイムにお住まいの方々、若年性認知症の方々のグループ等に協力いただきながら、ハイムで地域の祭りを開催しました。

1. 祭りにすることで、特に地域の子育て層を集客しました。
2. 子どもを対象にスタンプラリーを用意。障がい者スポーツ体験(ボッチャなど)や車椅子体験などを組み込み、福祉的な視点を養う機会としました。
3. スタンプラリーの中に参加者が交流できる仕掛けを用意し、関係性を広げることができました。
4. コンテンツの中に駄菓子屋を用意することで、祭り開催以降も子どもたちがハイムに足を運ぶきっかけの一つとすることを企図しましたが、継続的に駄菓子屋を運営いただける適任者がみつからず、今回も残り課題となりました。

また、出演・出展するそれぞれの団体で、祭りまでに複数回会議を行い、趣旨を考えながら準備を進めていただけました。

協同した団体

- 東灘こどもカフェ
- ろっこう医療生協
にじいろクリニック

地域の概要

コープこうべのサービス付高齢者向け住宅「コープは～とらんどハイム本山」(以下ハイム)がある東灘区田中町は、高齢化率は20.3%と全国同26%、兵庫県同26.3%、東灘区23.6%に比べて、若年人口が比較的多い地域です(2017年現在)。

しかし高齢化が進むとともに、それに伴った暮らしの問題も増えてきています。問題を、解決に導くため、従来の自治会等のネットワークに加え、ハイムが地域の老若男女が集う拠点として認知されればと考えています。

他団体と協同することで発見したこと

協同が協同を呼び、数珠つなぎりに参加団体が増えました。また、参加団体のメンバー同士の交流も多くみられました。前回、小学生向けと自閉症や就学前の子どもも参加できるスタンプラリーを実施。今回は、2、3歳のお子様から障がいをお持ちの方、ご高齢の方まで、すべての人が楽しめる内容とし、参加者が増加しました。

将来イメージ

単に数字を追うだけでなく、効果的な仕組みとして改善しながら、その他の行事イベントも含めて、継続的に地域と関わっていきます。

各取り組みも継続的に実施展開できるように、持ち出しをしなくてよい収支モデルに仕上げます。また、祭りはもとより、普段から、多くの地域団体の皆さんから関わりたい・参加したいとお声をいただけるようにしていきます。

成果と教訓

成果

前回春まつりからの数値比較

※来場者数に、参加団体構成人数は含みません

- 参加団体数: 13→16団体、運営・発表者数: 130→178人
- 来場者数: 387→386人
(うち大人246→250人、子ども141→136人)
- スタンプラリー参加人数: 52→75人

教訓

前回の春まつりでは、当日の運営の窓口を1人で担っていたため、参加団体からの相談等に円滑に対処できませんでしたが、今回は各ブースに責任者を配置し問題なく運営できました。

数値的に関与者が増えることはよいことですが、一方で、会場の広さ、混雑時の安全確保の視点から、適正規模の集客を目標として設定し、もっと地域のつながりや祭り後の協同につながるように今後関わっていきたいと考えています。

京都生活協同組合

活動名 | 地域の居場所作り推進及び、リーフレット作り

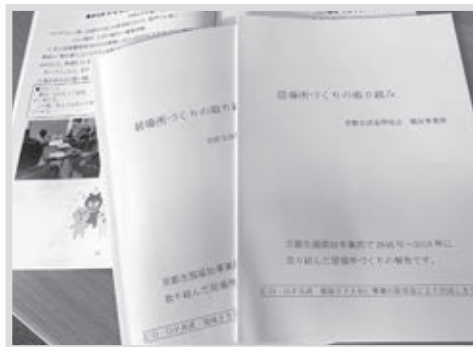
活動のきっかけ

居場所は、乾隆地域包括センターの呼びかけから。冊子作りは、京都生協からの発案。

活動内容概要

上京区で2か所、①咲くあん上京（サービス付き高齢者住宅）②興聖寺（お寺）のコミュニティスペースをお借りして、毎月1回 居場所を開催する。

今回は、この居場所の立ち上げから2018年12月までの活動報告をまとめる。



協同した団体

- 京都市上京区社会福祉協議会
- サービス付き高齢者住宅 咲くあん上京
- 興聖寺
- 乾隆・小川・誠逸の各地域包括センター
- 京都市域地域リハビリセンター

地域の概要

京都市上京区が対象。京都市内でも高齢化率が高い乾隆小学校区をある。

（高齢化率 全国26.7% 京都市25.2%
上京区 25.3% 乾隆地域30.0%）



他団体と協同することで発見したこと

- 協力体制が比較的簡単に作れたこと、協力的な体制で運営できたこと。

将来イメージ

- 厚生労働省が提案しているように、一切の運営を参加者で運営できるようにする。
- 現在関わっている団体は、徐々に中心的に関わらないようにしていく。

成果と教訓

成果

- 興聖寺で、2か所目の居場所が運営できた。
- 2か所目の居場所立ち上げで、新たに小川包括支援センター、誠逸包括支援センター、京都市域地域リハビリセンター、京都市上京区地域介護予防センターの協力を得ることができた。
- 2か所とも毎回20名程度の参加があった。

教訓

- 居場所でのプログラムを準備しすぎない・準備したプログラムを押しつけてはいけない事で、逆に参加者が増える。
- 「健康」をキーワードに参加者を募ると、健康な人しかこない。フレールな状態の方は来られない。
- チラシをいくら配布しても参加者は増えない。参加者の口コミが最も効果的。

コープ自然派奈良

活動名 | アートが結ぶ東日本大震災被災者の保養受け入れと避難者交流

活動のきっかけ

原発事故の影響を受けている方々に、放射線量などを気にせずのびのびと過ごし、心身ともにリフレッシュしていただくために2016年から保養キャンプを開始しました。

活動内容概要

- ・夏休み保養キャンプ「保養の旅えんむすび」
アートで心をむすぶ「手仕事」「ものづくり」を中心に、世界遺産の東大寺参拝などの観光や、川遊びなど外で思いっきり遊ぶプログラム、そして、無農薬の野菜やお米、こだわりの調味料を使った穀物菜食の食事と養生講座で心も身体も癒す4泊5日の保養キャンプを開催しました。
- ・避難者交流会「紅茶の時間」 毎月1回、年9回開催
奈良県に避難してきた人が安心して話し合えるオープンスペースを開催しました。
- ・4/21アースデイ奈良2018、3/21未来に種まくちっちゃな春まつり
ブース出展

協同した団体

- 保養の旅えんむすび
- nara-action
- 一般社団法人はなまる

地域の概要

東日本大震災・福島第一原発事故から8年を経て、問題はまだまだ山積していますが徐々に関心が薄れています。地域に避難した人など放射能への不安について周りに話せる人があまりいないという声も耳にし、支えあうネットワークが必要です。



他団体と協同することで発見したこと

今回で3回目となる保養キャンプはボランティアが約40名に増え、それぞれの団体が持つスキルを持ち寄り、きめ細かいケアのできる保養キャンプに成長しました。ボランティアの年齢も10代から70代と幅広く、大きな1つの家族のような雰囲気の中で保養に来た人だけでなくボランティアも癒される時間となっています。

将来イメージ

原発事故は同じ時代を生きるわたしたちみんなの問題です。これからも保養を必要としている人がいるかぎり長く保養キャンプの活動を続けていきたいと思っています。

震災や被災地の人たちへの想いを忘れず、奈良に避難された方も一緒にあたたかな人の輪が広がるような活動を目指したいと思っています。

成果と教訓

成果

今年の保養キャンプには福島県、東京都、千葉県からの3家族12名(うち子ども9名)が参加し、参加者のなかには1週間ほど保養キャンプに参加した後では、尿に含まれるセシウムが検出されないと報告してくださった方もおられ、受け入れる側もやる気と勇気をいただきました。

アートで心をつなぐプログラムはどれも大人も子どもも夢中になれる素敵な時間でした。玉ねぎの皮と茜の根で野染めした20メートルの布はとても美しく、今後の活動アピールに活用していく予定です。

「紅茶の時間」には約70名の方が参加し、地域の脱原発・避難者支援をめざす人の輪を広げることができ、県議、市議の保養キャンプへの参加にもつながりました。

教訓

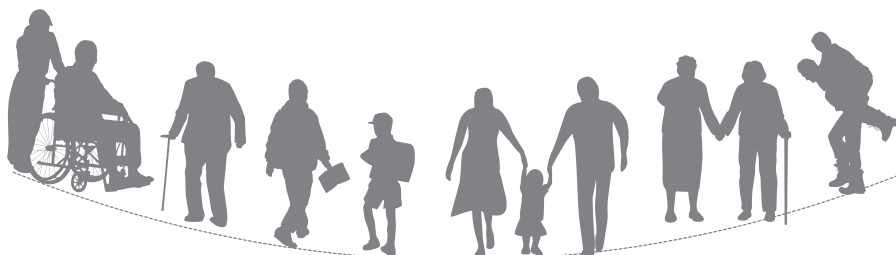
各種助成金が減ったため財政面で厳しく、結果として保養キャンプ参加者への交通費支援ができませんでした。遠方からの参加や家族の人数が多い方は参加をためらったり、あきらめたりするケースがあると聞いています。生協で恒常的なOCRカンパ窓口を開設しましたが、今後はさらに情報発信すること、幅広い人・団体との連携を広げることが大切だと感じています。

テーマ

2



**命を守り、
その人らしい生き方が
できるようにする**



一般社団法人 やまなし空と風-Discovery Of Life

活動名 | ほくとProof of Life プロジェクト (人それぞれの生きる証をみつける活動)

活動のきっかけ

代表理事が前職でヘルスケアの仕事をしている中で、超高齢社会、少子化の時代におけるヘルスリテラシーの改善が急務であると考え、現在の理事とともに、代表理事の親戚が空き家として保有している古民家を借用し、一般社団法人を設立。当活動を企画し、活動を開始しました。

活動内容概要

人それぞれの生きる証をみつけることを目的に、山梨県北杜市の古民家をベースに活動を行っています。

◎病気を予防する人、◎人生観・死生観を考える人、◎医師と一緒に語れる人、◎人生を楽しむ人、◎友だちをつくる人、◎誰かの役に立ちたい人を増やすために、具体的な活動としては、健康よろずカフェと、わいわいとイベント&ばあちゃんバイキングを企画運営。健康よろずカフェでは、豊かな人生を過ごしてもらう生老病気の講演会、健康意識・予防意識を高めてもらうちょっと健康塾、お互いが大切な存在であることに気づく健康カフェを今年度は10回、開催しました。わいわいとイベント&ばあちゃんバイキングは楽しみながら健康増進を行って欲しいと、アクティビティーとランチを内容として5回開催しました。



協同した団体

◎生活協同組合ユーコープ
やまなし県本部

地域の概要

山梨県北杜市は、山梨県の北西部に位置する市です。人口は47,108人、世帯数は21,301 (2019年1月1日)、高齢化率は37.3% (全国28.0%、山梨県29.4%) です。

高齢者夫婦世帯数: 2,409世帯、在宅一人暮らし高齢者: 3,026人となっています。そのため、さらに進む高齢化に向けて、予備医療、地域医療に対する対策が急務となっています。また、首都圏からの移住者が増加しており、移住者と先住民との交流、共存も求められています。一方で、自然豊かなため、この地域で、癒し、憩いを求める訪問者も増加しています。



他団体と協同することで発見したこと

当法人理事に山梨県の出身者がいないため、運営するにあたり、様々なことで、想像以上に地域性があることが課題でした。しかし、地域を熟知している生活協同組合ユーコープやまなし県本部から、私たち理事が気づかない地域の特性、運営を進めるにあたっての地域に即した進め方や地域性など、様々なアドバイスをいただきました。

将来イメージ

山梨県北杜市で活動を継続することを第一に、川崎市多摩区をはじめ、さらに他の地域での広がり、また大学との連携をさらに広め、このような活動を運営できる人材の育成にも努めていきたいと計画しています。助成終了後の活動資金については、当法人の賛同者をさらに募るとともに、健康産業等に携わる民間企業、上記の川崎市多摩区をはじめ、品川区、世田谷区の医療法人からの協賛、青山学院大学ジェロントロジー研究所を始めとした超高齢社会に関係する研究機関との協同を目指し、一部は既に打ち合わせを行っており、自立できるように計画をしています。

成果と教訓

成果

地域の自治会長から、活動によりこれからの地元地域を担う人材を育てていただいていると評価をいただきました。先年度と比較して参加者数も平均5名程度増え、コンスタントに20名の参加となっています。また、新聞社等のマスコミや、地元コミュニティ誌の取材もありました。北杜市地域包括支援センターの職員の方が毎回、参加してくれ協力しあう関係となり、12月の健康よろずカフェで行った、日本プライマリケア連合学会副会長 大橋博樹先生による生老病死の講和には105名の参加があり、後日北杜市市民公開講座で同じ講座が開催されたことは、私たちの活動とプログラム内容に対する評価の一つであると感じています。

さらに同じ活動プログラムが川崎市多摩区でも毎月開催されるようになるなど、地域の広がりができたこと、参加している学生団体から、学生自身の成長に有効な活動だとの意見もいただくなど、私たちの活動が評価され嬉しく感じています。

教訓

最近、よく見聞きする“人生100年時代”を活動の中で、何度か紹介することがありました。その際に、参加した高齢者から「100年生きないとダメだと言われている気がして悲しくなる」と言われ、私たちの安易な言葉使いに気づかされたことがありました。私たちの活動の目的はただ単に平均寿命を延ばすことではなく、人それぞれの生きる証をみつけることです。高齢者のご指摘に、原点を見失わず、さらに丁寧な活動の運営を心がけている次第です。

生活協同組合パルシステム千葉

活動名 | 元気な高齢者が軸となる、パルシステム千葉多世代交流での地域コミュニティづくり

活動のきっかけ

介護予防、地域での子育てなどについて、生協が社会福祉協議会と協同してできることを模索したことがきっかけとなりました。

活動内容概要

- ・介護予防体操「パル習志野笑学校」を2018年5月11日(金)から毎週金曜日に習志野センター会議室で開催。参加者は延べ431人となりました。
- ・介護予防学習会「骨や筋肉の素は毎日の食事から」、認知症予防学習会などを開催しました。
- ・多世代交流講演会を①「健康寿命を延ばして地域で支えあおう」②「シルバー世代が子どものためにできること」③「みんなで考えよう、子どものためにできること」のテーマで3回開催しました。
- ・小学生対象学習支援「読書感想文を書きあげよう」8月20日(月)～24日(金)に開催しました。
- ・習志野センター祭り、交流プラザブレメンフェスタにて「小学生のおみせやさん」、「小学生のおみせやさん」を開催しました。
- ・小学生対象学習支援「春休みのおさらい・算数と国語のわからないところをいっしょに勉強しよう」を2019年3月26日(火)～30日(土)に開催しました。



協同した団体

- 習志野市東習志野地域包括支援センター
- 社会福祉法人八千代美香会ブレイメン習志野
- ワーカーズコープちば

地域の概要

習志野市は人口17万人強。30代、40代が比較的多い都市です。

- ・袖ヶ浦、秋津などUR(公団)の集合住宅では、超高齢化が進んでいるが、津田沼駅南側「奏の杜」周辺は30代から40代が転入してきています。
- ・習志野センター、(株)パル・ミートのある実籾、東習志野地域は、農家を営んできた旧住民、集合住宅に入居している子育て世代、市営住宅や県営住宅に入居の単身高齢者などが混在しています。
- ・高齢化率(65歳以上人口)は、パル・ミートがある実籾23.0%、大型マンションが並ぶ東習志野2丁目12.9%、東習志野5丁目24.4%、習志野センターがある東習志野6丁目は人口が少ないものの高齢化率は30.5%に達しています。



他団体と協同することで発見したこと

習志野市という限定された地域での連携は、地域で行政や町内会などと繋がっている団体と活動を継続的に実施することで効果が発揮されます。

パルシステム千葉だけでは、地域の多世代交流をつくることはできなかったと思います。

将来イメージ

いま連携している習志野市では、介護予防体操、学習支援などの場を複数つくっていきたいです。

他地域でも連携可能な団体を見つけ、多世代の交流作りに協同で取り組んでいけたらと考えます。

成果と教訓

成果

- 介護予防体操「パル習志野笑学校」は、継続することで、2018年5月から2019年3月末までの参加が延べ431人になりました。
- 多世代交流を考える講演会を3回開催し、参加合計は157人。連携団体どうしの交流、意見交換の場としても有効でした。
- 子どもの居場所づくり学習支援子どもたちへの広報は、市行政を通して地域の学校や民生委員の方へ、連携団体が運営する子ども食堂で直接おこないました。夏は5人だった子どもの参加が、春は9人になりました。

教訓

イベントを開催するのとはちがい、地域のなかで日常的に交流できる場所をつくるのは、生協単独では難しいと感じます。

少子高齢化社会のなかで地域コミュニティの大切さを意識し、地域で活動する団体と連携して、コミュニティへの貢献を継続したいと考えます。

フードバンクちば

活動名 | いのちをつなごう～フードバンクちば・県内生協連携キャンペーン

活動のきっかけ

フードバンクちばは設立以来、県内生協の助成事業等を利用することで各生協との連携が広がってきたが、各生協との話し合いの中で県生協連も含め県内生協で一斉に取り組むことで生協組合員や市民に対する食品ロス削減や貧困問題の啓発が進むと認識に至ったため。

活動内容概要

- ・店舗や配送センターで食品回収ボックスの設置や配達時の直接回収を行うなどフードドライブを実施している。またキャンペーン期間中は5トンの回収を目標に、組合員が参加する集まりやイベントの参加者に協力の呼びかけも行った。また、県生協連加盟の千葉県庁生活協同組合、千葉県高齢者生活協同組合、全労済千葉推進本部にもお声がけし、ご協力いただいた。
- ・キャンペーンの共通ロゴを作成し、共通チラシ・ポスターや各生協のチラシなどで広報を行う。また、プレスリリースなども行った。
- ・キックオフ・イベントではフードバンクちばの説明と併せてフードバンク山梨理事長による講演会を行い、活動に関心を持っていただくと共に生協と連携したフードドライブの認知度を高めた。
- ・集まった食品の回収・仕分け作業などは、生活困窮者自立支援機関と連携して、生活困窮者等の働く場・活動の場として行い、集まった食品は、各市役所や社会福祉協議会・生活困窮者自立支援窓口等を通じて、困窮する世帯への緊急一時支援食品として活用した。また、利用者の声をご寄付いただいた方々にフィードバックする取り組みとして、アンケートはがきを作成し送付した。
- ・キャンペーン活動について途中経過や結果について広報するための特設ホームページを開設した。

協同した団体

- 生活クラブ生活協同組合(千葉)
- なのはな生活協同組合
- 生活協同組合パルシステム千葉
- 生活協同組合コープみらい
- 千葉県生活協同組合連合会

地域の概要

県の人口は約627万人、面積は約5千km²で、人口は全国第6位。県内には100万規模の人口を有する政令指定都市の千葉市を筆頭に、人口20万人大都市が6市と中核市同等の人口を持つ自治体が多数存在することも特徴。首都圏のベッドタウンであると同時に、京葉工業地帯や東京湾岸の埋立地の製鉄所やコンビニート、関東平野の地勢を生かした近郊農業や漁業が盛んで、バランスの取れた産業構造となっている。

千葉県生活協同組合連合会加入生協は12生協及び準会員生協2生協。生活保護の受給率は1.3%と全国平均(1.7%)より低いが、千葉市(2.0%)、松戸市(1.9%)等、都市部の自治体では高くなっている。

他団体と協同することで発見したこと

生協の組合員にフードドライブに協力していただくだけでなく、取引事業者からの寄付(なのはな生協)、破袋した米や余剰のおむつなど生協の事業活動からの寄付(コープみらい)、子ども食堂等への食品寄付(パルシステム千葉)など、派生した取り組みが広がっている。

連携キャンペーンも2年目を迎え、県内生協・県生協連の連携が広がる中で、農協など他の協同組合セクターへの協力の呼びかけも始まった。



将来イメージ

2年目の取り組みで、フードドライブについては認知度が高まってきているが、継続して行うことが必要。年に1度、県内共通キャンペーンとして行うことと、各単協ではそれ以外の時期に独自の取り組みとしてフードドライブを行っていただくことで、食品ロス削減と貧困問題への貢献に、より効果が上がることが見込まれる。

今年度、協力という形でご参加いただいた県庁生協や全労済、高齢者生協についても、次年度以降本格的に連携を広げていきたい。

成果と教訓

成果

- キックオフ・イベントには、108名の市民が参加し、食品82.4kg(昨年度は午前・午後で67.3kg)を持ち寄った。また、企画全体への感想では、「フードバンクの活動に関心を持った(38人 58.5%)、家庭での食品ロス削減に取り組みたい(44人 67.7%)、機会があれば食品を寄付したい(43人 66.2%)、生協を通じて協力したい(44人 67.7%)」という回答であり、食品ロス削減とフードバンク活動の啓発という目的は達成できた。
- 主な感想として、「日本の貧困について考える機会となった」「家庭の余剰食品の提供だけでなく、寄付をよびかけてもいいと思う」「個人会員や企業の協力を募ることができたら」等いただいた。
- フードドライブキャンペーンでは、各生協が熱心に取り組み、キックオフ・イベントも含め、昨年の2.5倍の約5.9トンの食品を集め、目標を達成することができた。

教訓

毎年続けていくことで認知度が高まり、各生協とも寄贈量が昨年度に比べて増加している。また、生活クラブやパルシステムでは、昨年度に比べてフードドライブを実施したセンター数が増えていることも寄贈量の増加につながっていると思われる、各生協内部で取り組みを広げたいと感じる。



きらくクラブ

活動名 | みんなで作ろう! 私たちの居場所「きらくクラブ」

活動のきっかけ

高齢化が進んでいくなか、平成25年9月高齢者の居場所づくりとして「きらくクラブ」がはじまる。

活動内容概要

・地域リビングとしての活動

1. 月・水・金 10時～15時
2. きらくマルシェ：第3水曜日に地域の野菜やパン、花の苗、和菓子の販売、きらく食堂(スタッフが調理)やミニバザーの運営
3. スタッフ自宅を提供してのガーデンカフェ、えんがわカフェの開催
4. 地域交流会：小規模保育園園児ときらく利用者様との「敬老の集い」
5. 地域のボランティア講師による講座
6. 「○○さんのつくった○○を食べよう」きらく男性スタッフによる食事会
7. 子ども食堂(confetto)を開催：夏休み、冬休みのイベント、世代交流の場
8. 模原市住民主体体操(B型)：住民主体のミニデイサービス(百歳体操+交流)
9. きらくカルチャー：地域講師による文化的な活動
10. コープフードロスの受け取り
11. 社協福祉祭(小山ふれあいのつどい)に協力：100食提供
12. 「クールシェア」場所の提供

事務局では、月1回きらく会議(月の活動の振り返りと次月の予定の確認。各担当からの報告及び確認事項の周知)2019年4月からの新拠点探し(2018年12月より「空き家探し」に小山高齢者支援センターの助けを受け、日常活動をしながら空き家にポスティングしていく)。



協同した団体

- 生活協同組合ユーコープかながわ たすけあいネットワーク
- フードバンクかながわ

地域の概要

相模原市小山地区は、JR横浜線を擁し、駅北側には広大な相模総合補給廠を抱え平成29年～30年にかけて南北道路、東西道路が整備された。また、年々都心からお一人になった方が相模原駅付近等のマンションで生活されている例も多く見られる。



他団体と協同することで発見したこと

コープからの食材提供により安心・安全を軸に、フードコミュニティの方による野菜の提供で季節の食材を使い利用者の方(子ども・ママ・高齢者)に幅広いメニューをお出し出来るようになった。フードコミュニティについては、直接届けて下さるため顔を見ながらお話が出来る「きらくの活動」を振り返ることのきっかけとなる機会を得ることがある。又、外からの情報が入ることによりスタッフ自身が利用者の方の立場に寄り添いながら「まず自分たちが楽しい」を基本に活動していくことの大切さを学んだ。

将来イメージ

高齢者に限らず「きらくクラブ」がそこにあるから行ってみようと思ってくれる居場所つくりをしていく。「一人ではない、今日はおしゃべり出来た、楽しく食事が出来た、笑った」そんな自然体の居場所つくりが出来たらと考えている。

成果と教訓

成果

平成30年度は家賃補助金の減額と大家さん側にも変化があり、スタッフ一同「きらくクラブ」は閉める以外無いと思っていた。不動産会社社長さんを通して大家さんが家賃を大幅に下げて下さり3月まで活動出来た。今後どのようにするかが幾度となく話され、小山高齢者センターの方からも助言・提案をいただきながら一緒に空き家にポスティングしその中の1軒を2019年4月からお借りすることになり、利用者もホッとした表情が見られた。

●マルシェ	10回	平均45人
●子ども食堂	3回(子どものみ)	平均18人
●きらくカルチャー	8講座	平均30人
●昼食会	12回	平均10人

「きらくクラブ」が利用者、地域に定着してきており、「きらくの食事は安くて美味しく、スタッフがいつも明るく元気に受け入れてくれる」との声が届く。小学生に会うと「今度いつするの」と聞かれる。「きらく分家」も地域に必要とされ、各々が地域にあった活動をしている。高齢化が確実に進んでいくなか、一人でも多くの方に居場所としていただけるように考えている。

教訓

- 1年目・・・スタッフがワクワクしながら取り組む姿がみられる。
- 2年間・・・前年を振り返り取り組もうとする気持ちが全体から感じられる。
- 3年目・・・活動が安定してきて穏やかに活動をしていく。

2019年4月から移転をすることになり、スタッフ全員が目標にむかって行動している姿がみられ、利用者は勿論自分たちの新たな居場所つくりにもなっている。

特定非営利活動法人 あなただけの乳がんではなく

活動名 | 乳がん啓発・ピンクリボンセミナー

活動のきっかけ

2017年11月、コープ組合員の依頼によりコープ指宿店で乳がん啓発セミナーを実施。

コープかごしま担当者とセミナースケジュール等調整の連携を取り、さらに多くの地区で乳がんの知識を深めてもらうため、他店舗での展開を始める。

活動内容概要

1. 生協店舗誕生祭で啓発活動を行った。(3店舗)
啓発活動：乳がん検診・乳房自己チェック法のパンフレット配布
乳がん啓発ティッシュ配布、自己チェック法の紹介
乳房触診モデルの展示・体験
2. ピンクリボンイベントを開催。(1店舗)
啓発活動：乳がん検診・乳房自己チェック法のパンフレット配布
ピンクリボンミニセミナー開催(午前・午後2回開催)
自己チェック法の紹介、乳がん啓発ティッシュ配布
乳房触診モデルの展示・体験
3. 乳がん啓発ピンクリボンセミナーを開催。(6店舗)
啓発セミナー内容：①講話「乳がん早期発見のためにできること」
②「乳がん体験者からのメッセージ」(体験談)
③質疑応答

協同した団体

- 生活協同組合コープかごしま
- 社会医療法人 博愛会相良病院

地域の概要

乳がんの早期発見につながるのが乳がん検診であるが、鹿児島県の乳がん検診受診率は23.14%(鹿児島県HP：平成28年度69歳以下のデータ)で、国の目標とする50%に満たない。



他団体と協同することで発見したこと

- 生協店舗の誕生祭への啓発ブース出展は、来店者も多く、乳がん啓発ティッシュ配布により、多くの方に啓発できた。
- コープかごしまとの連携で、地域への広報が十分にできた。
- セミナーでは「がんへの経済的な備え」についても触れるが、コープの共済担当者の協力により詳細な内容を伝えることができた。

将来イメージ

鹿児島県民が乳がんについての正しい知識を学び検診の重要性を理解し、乳がん検診を受診する。鹿児島県の乳がん検診受診率が向上し、早期発見、早期治療につながることを期待する。



成果と教訓

成果

- ①生協店舗誕生祭での啓発：3店舗で開催
啓発ティッシュ各店舗100個配布、自己チェック法セミナー受講者にファイル進呈
- ②ピンクリボンイベント：1店舗で開催
啓発ティッシュ 100個配布、セミナー受講者にファイル進呈
ピンクリボンミニセミナー開催(午前・午後2回開催、参加者計6名)
乳がん検診受診者50名
- ③乳がん啓発ピンクリボンセミナー開催：6店舗で開催
参加者延べ 83名 セミナー受講者にファイル進呈
参加人数の少ない店舗もあったが、参加者の関心は高く、セミナーでは「周りの方々へ早期発見、早期治療の重要性とがん検診受診を伝えてください」と呼びかけた。
※指宿店では啓発セミナー開催の約1.5か月後に乳がん検診を開催したところ、予定数(50名)を超える予約申し込みがあり、セミナーの効果があったといえる。

教訓

- コープ広場でのセミナーは参加者が多かったが、ピンクリボンセミナー単独の開催では、参加者の少ない店舗もあった。
- セミナー参加者やイベント来場者の乳がんへの関心は高かったが、乳がんや自己チェックの知識があいまいな方も多く、啓発活動の必要性を痛感した。

富山県生活協同組合連合会

活動名 | 福島子ども保養プロジェクト in とやま2018

活動のきっかけ

朝日町とは見守り協定や物資協定を締結しており、本企画の取り組み主旨に賛同していただきました。

活動内容概要

「福島子ども保養プロジェクト」の一環として、今回で12回目となる企画を開催しました。

■開催日：2018年8月24日(金)～26日(日)

■参加者：約100名

(内 福島県内の8家族、22名、県内生協54名、地元の協力多数)

1日目：オリエンテーションの後は、ヒスイ海岸でヒスイ探や釣りをしました。夜は交流会でゲームを楽しんだあと、星空の下で花火をしながらマシュマロを焼いて食べました。

2日目：宮崎漁港で魚釣り、皆で100匹以上を釣り上げました。その後カルチャーセンター宮崎で「勾玉づくり」と「魚さばき&たら汁づくり」を体験、釣り上げた魚を料理してもらい、おいしくいただきました。午後は、家族対抗ビーチボールバレー大会を楽しみ、スイカ割りで大盛り上がり。地元の方々と夕食後は、笹川秋祭りへと出かけ盆踊りを楽しみました。

3日目：自然体験学校「夢創塾」へ。「森のブランコ」「大シーソー」、ヤギとのふれあいなど、外でゆっくり大はしゃぎで遊びました。3日間の振り返りとなる「おわりの式」では、福島からいらっしゃったご家族に一人ずつ感想を話していただきました。たくさんさんの思い出を胸にそれぞれが帰路につきました。

協同した団体

- あさひふるさと体験推進協議会
- グリーンツーリズムとやま

地域の概要

富山県朝日町は、高齢化や人口減少が深刻となっております。より多くの方に朝日町にきていただけるよう、町をあげて活発に朝日町をPRする活動を行っています。



他団体と協同することで発見したこと

回を重ねるごとに、朝日町でお手伝いして下さる団体やスタッフとの信頼関係が強まり、次回開催に向け、より良い提案が出されるようになりました。

将来イメージ

- 福島のことを知っていただき、継続した支援活動を展開していきます。
- 福島子ども保養PJ以外の活動連携に発展させます。

成果と教訓

成果

会員生協スタッフで富山大学生協の学生委員の参加者が8名から11名に増えました。また、取り組みの主旨を先輩委員がしっかりと後輩に伝えてくださり、内1年生の参加が4人となりました。地域生協スタッフも4名増えました。

教訓

取り組み主旨を伝え、継続して取り組むことで、新たなスタッフが増え連携団体も増えてきます。信頼関係が深まります。

テーマ

3



女性と子どもが 生き生きする



特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫

活動名 | つながる「居場所」のつくり方～ここからカフェ～

活動のきっかけ

姫路青山コープのつどい場の有効利用を考える「四者連絡会議」（コープこうべ、姫路市社会福祉協議会、納屋工房、生涯学習サポート兵庫）をきっかけにコミュニティ食堂ネットワーク等の事業を協働しています。

その中でも当団体が専門とする「子ども・親子」「居場所」に関する活動にクローズアップして実施しています。

活動内容概要

「四者連絡会議」を中心に、地域において必要な支援について考え、そこにつながるいろんな人々を巻き込みながら、実行に移してきました。必要な支援を必要な人へとつなぐためのネットワークがゆるやかにですが、線としてつながっていると感じています。

- ・つなカフェ：地域の世代を超えた人が興味をもつ活動として「制服交換会」を実施しました。
- ・おしゃべりカフェ：昨年度購入したマット・絵本等を常時設置し、立ち寄った親子やつどい場を拠点に活動する団体の利用時に活用されています。
- ・つながる「居場所」のつくり方講座：地域の人々が集う「居場所」の存在意義や運営のポイントを学びました。最終日には「1DAYまちかどカフェ」を開催。地元の人から地域の様子を聞き、どんな支援が必要か、生の声を聞くこともできました。次年度の継続実施を検討しています。
- ・つながる「居場所」MAP作り：姫路市内の「子ども食堂」「親子・子どものつどい場」に関する情報を集約したMAPを作成しました。情報収集を進めながら、地域の中での「居場所」の偏りを感じる部分もありました。

協同した団体

- 生活協同組合コープこうべ
第7地区活動本部
- 姫路市社会福祉協議会

地域の概要

近年では珍しく、自治組織がしっかりとした地域です。民生・児童委員や自治会の協力体制も悪くはありません。

しかし、日中子どもや親子の姿を見ることはほとんどありません。近くに駅もありますが、そこを利用する若者や親子の姿も少なく、つどい場前もただ通過するだけの場所となっています。「もしも」の時に共助体制を作ることが急務であると考えます。



他団体と協同することで発見したこと

- 協同する団体同士が「核」となり、情報や協力依頼などを発信することで、「それなら、一緒にやろう」という新たな団体の申し出があったり、ネットワークが強化され、新しい取り組みが生まれ、より地域活動が元気になっていったように思います。
- 自団体だけでは知り得なかった地域の現状を現場の声として知ること「自分たちにできることは何だろう」という次のアクションを考えるきっかけを得ることができました。

将来イメージ

- 子育て世代・高齢者世代に若者世代（高校生、大学生）が加わることで、地域の中で顔見知りが増え、震災等の「いざ」というときに共助できる地域になるよう、もっと積極的に「つどい場」に人が集まる仕掛けを作っていきたいと思います。
- 講座や集う場に「参加者」や「講師」として来る人々が、つどい場で自らプログラムを企画したり、運営の方法を考える側へと立場を変えていくことで、運営の主体が多様化し、より地域に密着した「集う」場になり、運営が日常化していくと考えます。

成果と教訓

成果

- それぞれの事業に関わった人や団体が、「つどい場」だけに限らず、共に地域課題を解決していくための協力関係まで強まっていると感じます。参加者募集の際も今までであれば、自団体で考える方法だけでしたが、みなさんに協力を求めることで、情報を必要な人に届けていただけています。
- つながる「居場所」のつくり方講座実施から、次の展開（まちかどカフェの定期実施の検討）へと話が進んでいます。これは、「まちかどカフェ」の際に、来てくださった方の生の声を丁寧に聞き取りましたからこそだと思います。地域にとって何が必要なのか？丁寧に聞き取りが必要であるということを知ることができました。

教訓

- 講座受講生募集の際に「こんな人に来て欲しい」というターゲットを絞り込むことで、「自ら学ぶ意識」の高い人が集まったように思います。ただ「集める」のではなく、次につながるように「集め方」も意識しなくてはよい機会にならないと思いました。
- まだまだ「つどい場」の認知が低いということ。現在は「なにか（催しや活動）があるから行く」人が大半ですが、地域の中での「居場所」になるために、まずは存在を知ってもらうための仕掛けを丁寧に作っていかなくてはいけないと感じました。

NPO法人 福島SAND-STORY

活動名 | 福島県の子どもの肥満防止等健康づくりのための屋外遊びと生活改善プロジェクト

活動のきっかけ

2013年11月、福島市で開催された「福島インドア砂場サミット」を契機として、福島県内の砂場環境の取り戻し、改善、新たな創造を目指す関係者が集まり、活動を開始した。これは本来、乳幼児期の子どもたちにとって重要な役割を果たす砂場での遊びが東日本大震災で大きな制限を受けたことから、安心・安全な砂場環境を創出し、事業を通して子育て・子育て環境の見直しと改善を図り、その活動を広く国内外に発信することを目指しての団体結成であった。2016年4月に、NPO法人格を取得し現在に至っている。

活動内容概要

1. 質で安全な福島県棚倉町産出の砂を用いて、市民が楽しめるサンドアートイベント「ブラージュ」を福島市で2回、いわき市で1回開催。
2. 会場では、コープふくしまによるホスピタリティ空間を設置して来場者に休息の場を提供するとともに、子育てや食育、健康・生活習慣改善に関するアドバイスをを行った。また、福島医療生協によるイベント会場での「足指測定」では、市民の健康意識向上の啓発を図った。
3. 福島市内の3大学からボランティアの学生が多数参加し、活躍した。
4. イベントで用いた砂を保育所・幼稚園・小学校に提供し、指導者を対象に研修を開催。
5. 福島県棚倉町にて、サンドアートを楽しむ実技研修や、「子育て・子育て」における砂の活動の重要性・町づくりのための活用の可能性を話し合う「砂ラヴ♡ワークショップ」「福島“砂”シンポジウム2018 in 棚倉」を開催した。

協同した団体

- 生活協同組合コープふくしま
- 福島医療生活協同組合

地域の概要

- ・東日本大震災後、福島県内では原発事故による放射線の問題から、様々なレベルにおいて屋外活動や砂遊びへの制限や大きな不安が広がり、今日もまだその影響が続いている。
- ・子どもたちは屋内での活動が習慣化したことにより、肥満や運動能力低下などの新たな問題の発生が指摘されており、幼児期から学童期への連続的な遊び環境の整備や体づくりのプログラムが課題となっている。
- ・原発事故によって避難したコミュニティや一旦県外に避難した後、再び福島市内に戻り始めている人々が多く住む地域があり、多様な住民らが気軽に触れ合って交流できる場所や機会が求められている。

他団体と協同することで発見したこと

- 子どもの健康や育ちに関する活動テーマは同じであっても、多様なアプローチの仕方や内容があることを知り、学ぶことができた。
- 他団体がそれぞれに関係を持つ人々や団体との新たなつながりが生まれた。
- 団体組織の運営方法について、他団体から新たな知見を得ることができた。

将来イメージ

- 人と関わりながら思いきり体を動かすことの楽しさを実感できる環境づくりにつなげる。
- 子どもの豊かな育ちに対する保護者の意識を高め、具体的な生活習慣の改善につなげる。
- 大学生ボランティアがプレーリーダーとして活躍できる環境の充実を図り、「故郷の未来づくり」という意識を持ってもらう啓発の場としていく。
- 行政との連携を継続していくことにより、市民の子育てや生活習慣改善の課題、支援態勢及びサポート方法をより確実なものへと高め、子どもたちの健康問題解決の突破口としていく。

成果と教訓

成果

- いわき市のブラージュではホワイトサンドの提供や砂場設営・砂像制作の支援、指導・アドバイスを実施し、NPO法人いわき鳴き砂を守る会との連携を深めた。
- 福島市の2回のブラージュには約600名の親子が参加し、コープふくしまによるホスピタリティコーナーでは、およそ50名の母親を対象に食育のアドバイスや子育てに関する寄り添いを展開した。
- 猛暑により砂場の屋内設置を余儀なくされた回もあったが、季節や天候を問わない通年開催への可能性が見出された。
- 福島医療生協の「足指測定」が大きな関心を集め、健康意識向上の啓発につながった。
- 福島市内の3大学から、学生たちがプレーリーダーとして参加。質の高い学びが得られることが学生間でも波及しリピーターの増加につながった。
- イベント終了後の砂を、7カ所の幼稚園・保育所・小学校に提供し、国公立幼稚園の指導者を対象にアフター研修を行った。
- 棚倉町でのワークショップやシンポジウムには、県内外から約100名が参加し、子どもの育ちに及ぼす砂の活動の重要性を実感してもらうことが出来た。また、棚倉町・棚倉町教育委員会との連携を深めることが出来たことは、今後、保幼小接続教育や町づくりの展開にも大きな可能性が期待される。

教訓

7月中旬の「こむこむブラージュ」では、例年にない災害レベルの猛暑に見舞われ、急遽、会場館内にも砂場の設置を加えることとなった。

今後も異常気象の懸念はぬぐい切れないと考えられることから、開催における条件整備を熟慮していきたい。



なのはな生活協同組合

活動名 | こども食堂からべえ・貧困と教育を考える

活動のきっかけ

貧困、収入格差が拡大しており、子どもを取り巻く状況が危機的となっていると聞き、そのような中で子どもの居場所づくり、学習支援、食の支援が必要ではないかと考え、子ども食堂の開設となった。

活動内容概要

- ・生協だけではなく、地域の方々と一緒になって開催する目的で「こども食堂からべえ運営委員会」を結成して運営している。
- ・毎月第2・第4土曜日に12時～14時に実施。高校生以下は無料、大人300円の参加費。2018年度4月～3月23日まで24回開催、1,555人参加、1回平均約65人。
- ・なのはな生協組合員4名、加良部地区社会福祉協議会2名、成田市民2名（1回8名で「こども食堂からべえ」を運営）。
- ・地域の高校生、大学生、食べにきた小学生もボランティアに参加。
- ・講演会「こども食堂が目指すもの」講師 湯浅 誠氏を共同開催。



協同した団体

- 加良部地区社会福祉協議会
- こども食堂からべえ運営委員会

地域の概要

社会福祉協議会の情報により、成田市内で準要保護・要保護児童の多い地域を対象に、加良部ショッピングセンター内に場所を選定。ひとり親世帯、独居老人が多いのもポイントとなった。

他団体と協同することで発見したこと

- 加良部地区社会福祉協議会より地域の様々な方を紹介いただき、活動の幅が広がっていった。
- 運営委員会で開催場所・名称・運用方法・資金管理などを検討し、こども食堂の告知も生協の名前ではなく、運営委員会の名前ですることにより、地域に根付いたように感じた。

将来イメージ

- 子ども食堂はご飯を食べるだけでなく、学習支援、困っている事を相談するなど、地域に根を張り交流できる場を目指す。
- 子ども達は未来の種であり、国や行政が現状の制度ではサポートしきれない部分を支援する。

成果と教訓

成果

- 社会福祉協議会の力をかり、成田市からこども食堂「からべえ」の後援をいただいたり、市の子育て支援サイトへの掲載していただき、地域の方々に広く周知することができた。
- 成田市の紹介により市民からの寄付（募金・物品）や地元企業からの協力を得ることができた。（机・椅子・食器・お菓子・紙ヒコーキ教室等）
- 近隣の2つの小学校に認知され、こども食堂のチラシを配布していただけるようになった。
- こども食堂の場所が高齢者の体操教室の場所になったり、他団体の会議場所になったりと、こども食堂を中心に広がりをみせる。
- 成田市にある3つのこども食堂で講演会の開催することにより、連携、情報共有することができた。

教訓

- 生協だけではなく地域の人達との協力したことが活動に幅をもたせ、大きく広がっていった。
- 自治体の協力が良い効果をもたらした。
- 地域の方々の協力が必要不可欠。

特定非営利活動法人 いなほ

活動名

住民が主体で行う子どもの健全育成等を目的とした共生型「子ども食堂」の自立に向けた運営支援事業

活動のきっかけ

当法人がいわて生協に協力を依頼し、子ども向けの地域イベントを実施したのがきっかけで、同じ社会課題を認識していた岩手県生活協同組合連合会、滝沢市社会福祉協議会の3者共同での事業が始まりました。

活動内容概要

盛岡市、滝沢市在住の方を対象に、「食を通した子どもの健全育成」「親の支援」「第三の居場所づくり」を目的に、障害の有無や年齢にかかわらず、子どもから大人まで多くの方が集まるコミュニティの場として、子ども食堂を3か所で計28回開催しました。

これらの活動を地域住民で運営できるよう運営支援を実施しました。

協同した団体

- 岩手県生活協同組合連合会
- 滝沢市社会福祉協議会
- わらしやん井

地域の概要

盛岡市と滝沢市の2市で実施しています。近年新興住宅地が複数整備されるなど、移住者が多く人口が増加している地域で活動を行っています。



他団体と協同することで発見したこと

地域の方々、生協連、社協、行政、企業などと協同で開催し次のような発見などがありました。

- ①子育て支援や子どもの貧困などに対して、多くの方が同じような思いを持ち何らかの支援必要と考えていること。
- ②複数の機関や地域の方々が協同することで、不可能と考えられていたことが可能となったほか、より内容の濃いサービスが提供できること。
- ③お互いの得意とする分野を積極的に生かすことで、継続的にかかわり続けていくことが可能であること。

将来イメージ

現在行っている活動は、子育て支援やコミュニティづくりにスポットをあてている部分も多く、地域の方々が行う地域のものとして活動できることが理想と考えています。

そのため、地域のボランティアの受け入れを促進するとともに、食材や寄付を地域の方や企業から定期的に受けられるよう仕組みづくりに力を入れていきたいと考えています。

成果と教訓

成果

- ①回を重ねるごとに参加者が増え、より多くの方に参加いただきました。
- ②実際に家庭に課題を抱える方へのアプローチもできる環境が整いつつあり、実際の支援につながったケースもあります。
- ③様々な寄付やボランティア希望者から問い合わせがあるなど、活動が地域に認知されてきていると感じます。
- ④活動されているボランティアの方々のやりがいにつながり、ボランティアも楽しんで活動できているのではと考えています。

教訓

- ①改めて衛生管理面の必要性を実感しました。地域に根差し、認知され必要とされる活動にするために、衛生面の徹底は必要不可欠だと考えております。
- ②本活動には専門的な知識のあるスタッフがかかわっており、家庭で抱える悩み事や課題を解決につなげるきっかけとなる機能を持たせています。このことを周知し、より多くの方が参加しやすく、且つ課題解決につながる場であることアピールする必要があると感じています。
- ③同じような境遇にある保護者同士が語り合い、想いを共有する時間がとても重要で継続してこのような場を提供する必要があると感じました。

生活協同組合コープみらい 地域クラブひだまり

活動名 | いじめ・不登校・ひきこもりから地域・社会のつながりへ

活動のきっかけ

不登校が増え、子ども・親たちが苦しんでいる、不登校からひきこもりに移行する、社会に出て重い負担を負いひきこもりになる、などたくさんの相談希望が増えている。どう地域・社会につながれるようにして行くか取り組み、その方向をさがっている。

活動内容概要

若者支援の農業体験活動として、耕作、種まき、草取り、間引き、収穫、販売、調理など取り組み、安心・信頼して人と関われる体験を積み重ね、自信を取り戻し明日へ希望が膨らむ活動をめざした。

いじめ被害・不登校・ひきこもりで悩み、苦しんでいる子どもたちが心をいやし、元気になり、希望がふくらむ活動、子どもの居場所活動をおこなった。子どもたちと大学生ボランティアが、自然の中で冬合宿をおこない、子どもたちが元気を回復する活動を行った。

講演会、親の会、電話相談・個別面談などを行い、悩み苦しんでいる親たちが不登校や子ども理解を深めながら、子どもに関わり、支えられるよう活動を進めた。登校拒否・不登校全国のつどいなどに参加して、全国の活動から学び、地域にその成果を広める活動を展開した。

協同した団体

- 不登校問題を考える東葛の会『ひだまり』
- 青空の会（我孫子）
- 学校に行かない子を持つ親の会吉川

地域の概要

子ども・若者をめぐる環境は厳しく、いじめ・不登校・ひきこもりは増えている状況があり、地域に実情を知らせ、サポートする体制をつくることは、大きな課題となっている。



他団体と協同することで発見したこと

- ①4団体世話人が相談を重ね、農業体験・行事・講演会・親の会などを協同で企画実施することで、より大きな力を発揮し、地域への広がりも深まった。
- ②お互いの団体の活動の目標・計画・様子・取り組みなど交流できて、それぞれの団体が活動内容を広げるようになった。
- ③行政の応援も得られるようになり、協同する団体や個人がさらに増えた。子ども・親たちが抱える悩み苦しみや地域の課題に大きく取り組めるようになった。

将来イメージ

- ①農業体験活動では、青年たちのアイデアを生かして生産や販売の活動を充実させていきたい。ひだまりカフェなどでさらに地域の人たちと、新しい出会いをつくりつながりを深めて行きたい。青年たちが働く場として経済的支援ができるよう収益を上げて行きたい。
- ②居場所を利用する子どもや相談者の子どもの年齢が高くなっているということがある、「社会につながる活動」に向けて支え、応援する事業を進めて行きたい。
- ③子どもの居場所活動、就労応援活動、親の会活動、電話や来所相談、進路就労相談など、事業をさらに展開して欲しいという要望があり、その要望に応えられるよう、世話人やサポーターを広く求めるとともに、研修や学ぶ機会をつくってお互いに力を育てて行きたい。
- ④これまでのひだまりの活動の成果を広く地域や行政に伝えることで、どんな働きかけや連携ができるのか探って行きたい。

成果と教訓

成果

- ①農業体験や販売活動、調理、ひだまりカフェを行うことで地域の人たちとのつながりができ、人と関わる安心感・信頼感を持てるようになった。これからの道を見つけようと活動を始めるようになった。
- ②子どもの居場所を年間127日開き、さまざま地域に足を踏み出すようになった。
- ③電話相談は年間総数100回ほど、個別面談は60人ほどあった。
- ④親の会には延べ総数約300人が参加した。お互いの思いを交流することで、子どもの内面や子どもへの関わり方などが理解できるようになった。
- ⑤広木克行神戸大名名誉教授をお呼びしての講演会は110人の参加で、「とても学ぶものがあつた」「またお呼びして欲しい」と好評だった。
- ⑥毎月の事業活動、講演記録や資料を配布、多方面の方々に読んで頂くことが出来た。
- ⑦子どもたちと大学生が交流し学びあい、親たちが子どもとの関わりを理解していく中で、学校に行くようになった、高校受験や大学をめざし勉強するようになった、ボランティアをしたい・働きたいと社会につながって行くなど、変化が続くようになった。

教訓

- ①子ども・親、かつて苦しんだ親、そして教員・元教員、相談員、医師などが交流し学び合う活動は、とても大事な活動であることを再認識した。
- ②一人ひとりの状況は異なり、難しいケースも多く、勉強を積み重ねて行く必要がある。
- ③子ども・若者たちのやる気に依拠し楽しみながら活動する機会をつくると、成長することがわかった。今後も子ども・若者たちの思いや声に耳を傾けながら、彼らが活躍できる場をつくっていききたい。
- ④多くの団体と手をつなぎ、力を合わせることで、課題が切り開かれて行くことを体験した。

生活協同組合おおさかパルコープ

活動名 | 子育てママからおばあちゃんまで安心できる地域づくりを

活動のきっかけ

東日本大震災時、被災地支援等を通して、避難所における女性問題の課題を多く見て来られた北区社協職員の話聞き、女性や子育て中のコミュニティの広がりを災害を切り口にした学習や体験から、女性たちが自ら声を上げ、北区社協と協働で啓発・防止を進める活動を展開したいと考えた。

活動内容概要

- 「妊産婦さん・乳幼児子育て向け！災害時のママ・パパの心構えセミナー」
- ・有事の際の妊産婦さんの体調・心の変化
 - ・母子手帳の活用
 - ・避難経路、避難先の確認
 - ・避難所での暮らし
 - ・平常時誰と繋がっていますか？
 - ・講演会とワークショップを交えてのセミナー

協同した団体

●大阪市北区社会福祉協議会

地域の概要

大阪市北区は、タワーマンションの急速な増加に伴い、人口の急激な増加と比例して、若い世代、特に子育て世代が転入し、新たなコミュニティが構築されず、孤立した子育て層も多くなっている。また、毎年1万人程度の転入・転出があり、人口の流動も大きい。

他団体と協同することで発見したこと

コープだけで実施するより、社協と協同したことで、情報量が多くなり、事業の幅、人とのつながりもひろがった。

赤ちゃんから高齢者まで、さまざまな人と接しながら支援の幅を広げている、社協のすばらしさがわかった。

自分たちの力では及ばないこと、知らないことを知り視野が広がった。

社協は被災地支援をしているだけだと思っていたが、防災など予防も行っていることを初めて知った。

住みよい地域づくりのため社協と協働することは必要であると感じた。

将来イメージ

定期的に個別でも協働でもセミナーを継続し、持続的な啓発をすすめる。

そのための一助として冊子を作成したので、それを活用し今後の成長につなげたい。

成果と教訓

成果

第1回	中三	コープ 6人	区社協 3人	計 9人
第2回	滝川	コープ 7人	区社協 3人	計10人
第3回	北区民センター	コープ 3人	区社協 7人	計10人

第3回は土曜日に開催したのでパパと一緒に参加が多かった。相互で情報発信することで参加者も広がった。

教訓

土曜日開催。誰にも聞けない現場の声を聞くことの大切さ。
外部と協同することで団体同士つながった。社協を身近に感じたこと。

子育て交流の広場ほっぺ

活動名 | 妊娠期からの子育てを支える広場

活動のきっかけ

母親の子育てに対するしんどさを毎日感じる。特に、出産直後のママは、世間と孤立して、孤独感を味わい、産後うつになってしまうケースが多いので、「この子を産んでよかった」と思える社会を作りたいと考えました。

活動内容概要

- ・マタニティー、赤ちゃんのひろば
- ・ベビーマッサージ
- ・助産師さんの育児相談
- ・お話会
- ・母親向け講座



協同した団体

- 生活協同組合コープこうべ
第4地区活動本部

地域の概要

古い街並みの中に新しい街がぽつぽつと出来、そこには若い夫婦が多く住まれています。親戚も知り合いもないアウェイ育児が多いです。

また交通の便も悪く、車は1台しかないため活動範囲も決まっています。

他団体と協同することで発見したこと

- コープの職員さんは、私たち子育て支援をするほっぺスタッフと同じ目線で活動をされ、今の子育ての話や乳幼児親子との関わりを積極的に持たれるところに、勉強になることがたくさんありました。

将来イメージ

企業や地域の皆さんが子育て世代を支え「どう?」「元気?」「何かサポートしようか?」など、気軽に声をかけられるようになっていくことを目標とします。

また、妊娠期に通える場所を充実させ「出産してもここがあるから大丈夫」と安心できる社会にしていきたいです。



成果と教訓

成果

出産前後のママの精神的な苦痛を受け止め、支えていきたいとの思いで活動しました。ひろばでは、赤ちゃんをお持ちのママたちの毎日の不安や孤立感などのお話に耳をかたむけ、「一人じゃないよ!」「がんばらなくてもいいよ!」「いつでもSOSを出していいよ!」と声をかけていきました。また、地域の方とお話をする場面では、今の子育て世代、特に赤ちゃんをお持ちのママたちの気持ちを伝えることを意識的に行いました。

年配の方からは「そんなことを考えてもみなかった。みんな私って幸せでしょう?」みたいに感じていたとの意見をいただきました。

ほっぺは日々いろいろなところで居場所づくりの活動をしており、三木市小野市ではかなり認知度も上がってきています。年間を通して乳幼児のママ約5,000人が関わってきました。

教訓

- 今回はプレパパやママが孤立しないように、日々参加しやすい事業を計画。実際には赤ちゃんがいるひろばに、妊婦が足を運ぶことはかなりの抵抗があるのだと感じました。妊婦の時は「私は大丈夫!」「産後うつなんてならない」という根拠のない自信から、家にこもり、産後にSOSを出せる場所を知らないママになってしまう。その結果、産後うつとなってしまうママが大変多いです。ほっぺだけでなく、百貨店や新聞社でのプレママの事業もあり人が集まらないということを知りました。次年度は、プレパパママに声をかけていくのと同時に、地域の方に今子育てをしている若い世代の気持ちを代弁して、地域で子育てを支えていく社会を作っていきたいと思っています。

北海道子どもの本連絡会

活動名 | 第41回北海道子どもの本のつどい砂川大会

活動のきっかけ

児童文学作家や絵本作家等の書き手、文庫活動や読み聞かせ活動、司書・教諭等の読み手や渡し手が、子ども達や周りの大人へ本の楽しさと素晴らしさを伝えたいという共通の願いを持っていたことから、それぞれの活動が一つになる機会の必要性を感じたため、つどいを開催することとなりました。

活動内容概要

1. 児童文学作家のこやま峰子さんをお招きして、講演会「未来への伝言～世界の子もたちの声を聴きながら～」を行いました。
2. 子どもの本に係る7つの分科会を行い、たくさんの方に参加していただきました。(分科会「かがく絵本とアクティビティ」「やってみよう☆書評合戦～ビブリオバトル～」「やってみようアニメーション～『はらぺこあおむし』でダウトをさがせ!～」「おはなしまるごと楽しもう!!」「くあいたかったよ!」峰子ワールドに～こやまさんを囲んで～」「語りの会」「創作」)
3. 生活協同組合コープさっぽろにご協力いただき、「えほんわくわくキャラバン」やキャラクターの「トドック」との撮影コーナーの設置、「空くじなしのガラポン大会」も行いました。



協同した団体

- 北海道子どもの本のつどい砂川大会実行委員会
- 生活協同組合コープさっぽろ
- 日本児童文学者協会北海道支部

地域の概要

北海道は広大であり、子どもの本に携わる活動をされている方々が一堂に会する機会は非常に少ないため、本つどいは交流や学びの場として貴重な役割を担っています。

他団体と協同することで発見したこと

経験豊かな団体と協同することで、企画内容が充実し、満足度の高い活動につなげることができました。また、地域に根ざした取り組みや人を紹介することで、開催地近隣でのさらなる読書推進の機運の醸成に期待できます。

将来イメージ

毎年異なる地域で開催することで、たくさんの「読書へ誘う種」をまくことができ、子どもたちの読書の芽が出てきて育ち、読書の習慣化が図られます。全道各地に本を介して仲間が生まれ、大人同士の心の結びつきも深まります。そのために、今後も「つどい」を開催し、北海道全体の読書への機運が高まるよう、ぜひ、地域に密着した活動をされているコープと協力して、継続に努めていきたいと願っています。

成果と教訓

成果

道内外から、412名の参加がありました。開催地をはじめ各地からお集まりいただいたみなさまが、子どもの本の素晴らしさを色々な手法で伝え合い、交流が図られました。また、そこで共有した情報や取り組みが各地に持ち帰られ、橋渡し役・そして作り手として個々の活動の発展につながっていくことが期待されます。また、本を通した楽しい体験で親子や身近な大人との絆も深まりました。

教訓

永く受け継がれてきたつどいの目的や意義を、協同団体と共有することの難しさを感じました。最初から、「何のために」「誰のために」という目的の確認や役割分担の明確化が必要だと感じました。それには、こまめな連絡や意思の疎通を図るなど、コミュニケーションを密にすることが必須だと思います。

特定非営利活動法人 まんまるママいわて

活動名 | 助産師とママでつくる、おいしく元気に笑顔になる子育て応援事業

活動のきっかけ

- ・母親自身が自分のために時間を使うことに消極的である一方で、自分の時間を持っていないストレスが、子育てのストレスにつながっている。
 - ・情報過多の現代で、シンプルに情報を整理し提供する場が必要。
 - ・食の大切さが認識される一方で、こだわりが強すぎたり、逆にレトルトに偏ったり、迷いながら離乳食・幼児食に向き合う母親が多い。
- これまでの活動を通じて、関わる母親たちに上記のような傾向が強くなっていることを感じ、食への働きかけが必要と考え、事業を計画し展開した。

活動内容概要

1. 子育てサロンの開催：手作りお菓子の提供や料理教室等、食への働きかけを行った。料理教室では家族のご飯をつくる過程でとりわけの方法を伝えた。赤ちゃんだけでなく、味付けが物足りなく感じる父親向けの工夫の仕方など、家族全体の食事について伝えた。基本的にはおんぶしながらの調理とし、母親たちがはじめておんぶする場所にもなり、育児技術の伝達・実践の場にもなった。また手作りお菓子はレシピをつけ、家でも作れるよう配慮した。家庭内でできるおやつ作りの提案も積極的に行った。
2. ヨガ教室の開催：赤ちゃんと一緒にできるポーズなど、楽しみながら家庭でもできる内容をお伝えし、ヨガで妊婦・母親の健康をサポートした。身体を動かした後は、食をテーマに取り上げた情報交換、アドバイスの時間を設け、運動と食への意識を高められるよう働きかけた。

他団体と協同することで 発見したこと

- 生協で取り扱う食材や、宅配弁当・家事サポート等、子育て期に役立つ情報を知り、参加者にお伝えすることができた。
- 生協主催の子育てサロンに講師として協力することで、他団体の行っているサロンの運営や、託児の方法等知ることができた。

将来イメージ

- 2019年度は産前産後サポート事業として、子育てサロンが北上市の委託事業になった。委託されたことで、安定して母親たちのサポートができるようになるので、内容を充実させながら、今後も継続事業となるよう展開していく。
- ヨガ講座は参加者数が安定してきたため、2019年度は自主事業として運営する。行政の委託も視野にいれながら、母親のリラックス・リフレッシュの貴重な場所として、今後も継続できるよう努力していく。

協同した団体

- いわて生活協同組合

地域の概要

妊婦の中でゴールが出産になっていて、産後のイメージが持てないまま子育てがはじまり、また少子化・核家族化により子育てを体験的に学ぶ機会が乏しく、子育てに孤独感や困難を感じる母親が増えている。

岩手県内は全体的に分娩施設の集約化が進み、病院での妊婦健診時等に、十分に不安を相談できないまま出産に臨んだり、産後のサポートが得られず孤立化しやすい現状にある。事業を開催した北上市は、県内において住みやすい地域と言われているが、転勤者も多い地域で、母親同士のつながりや、母親と地域のつながりができにくい傾向にある。また、移動のほとんどが車であり、運動不足になりやすい地域でもある。



成果と教訓

成果

- 1歳未満の子どもの割合が全体の69%となり、低月齢の児を育てる母親が安心して出かけられる居場所として地域に定着してきた。ヨガ講座は毎回初参加の母親もおり、転勤者が初めて関わる子育て支援の場所として活かされた。妊娠中に参加した母親が産後も参加するなど、妊娠期からの継続した関わりも行うことができた。
- アンケートを4回行い、高い満足度を示した。事業を通して現代の母親が抱える問題を解決する一助になったと評価できる。また、全回答者が「また利用したい」と回答した。
- サロンではおやつレシピを配布した。調理実習では季節を感じられるメニューを提供し、若い母親たちが使いにくいと感じがちな食材もとりにれた。調理実習型の離乳食教室が、家庭での実践につながった。
- 相談内容は多岐に渡り、専門的な相談をするために参加する母親もみられた。気軽に助産師に相談できる場所として、今後も継続していく必要性を感じている。
- 本年度も事業チラシの配布を行政に依頼した。これまでの経緯や継続年数等が認められ、2019年度から北上市の委託事業としてサロンを開催することが内定した。地道に継続してきた事業が行政に認められ、地域社会のサービスになったことは評価できる。

教訓

- 調理実習やアロマクラフト等動きがある講座では、座学のための講座に比べ、参加者同士の会話が弾み、交流が深まった。
- 転勤者はHPやSNSなどを通じて知り、参加することが多かった。インターネットの利用が、現代は有効な手段であるため、検索しやすいキーワードを入れる等工夫をすると、もう少し探しやすいと感じた。
- 事業を展開するだけでなく、将来の展望をイメージしておくことで、行政につながったときに提案でき、結果子育てサロンの委託につながった。また、国の施策についても知っておくことで、結び付けて提案することができた。

富山県有機農業研究会

活動名 | 富山型CSA（消費者参加型農場）構築に向けての啓発活動

活動のきっかけ

本研究会は有機農業を普及するための団体であり、生協も有機農家等との産直交流のあり方についてさらなる改良を求めているので、双方の意見交流のなかから、問題意識を共有することになったのがきっかけである。

活動内容概要

富山県内でCSA（消費者参加型農場）を構築するため、以下の啓発活動を行った。第一に、CSAを学ぶための現地研修（神奈川県「（株）なないろ畑」）、CSA専門家を招聘しての一泊研修会を開催した。

第二に、将来、生協と連携したCSA構築を模索しており、本会生産者が生協の交流会（産直キッチン）に参加、栽培方法について紹介するとともに、CSA事例について解説した上で、組合員（消費者）からCSAへの参加可能性についてのアンケートを実施した。また、本会会員による収穫祭を開催し、自家菜園消費者会員の交流を深めた。

協同した団体

◎生活協同組合CO・OPとやま

地域の概要

地方都市の周辺に農村が広がる地帯であり、都市と農村の交流、消費者と生産者の交流が行いやすい条件がある地域である。

他団体と協同することで発見したこと

消費者である生協組合員の有機農産物に対するニーズ、及び、生協としてCSAに関わる可能性について把握でき、連携の可能性があることを発見できた。

将来イメージ

本来、食の安全性への意識が高い消費者である生協組合員の意識をさらに高め、CO・OPとやまが進める支部産直（小地域内産直）形式を進化させ、地域の有機農業者によるCSAと連携を図る仕組みを構築する。

成果と教訓

成果

- ①CSAの現地研修には10名（本助成活用の本会会員5名、生協組合員3名、それ以外に自費参加者2名）が参加し、実態をみることにより、成立要件や課題等を把握した。
- ②研修会には約40名の参加があり、CO・OPとやまの産直担当者1名が参加し、現地視察参加者から感想・意見等が提出され、CSA現地視察の総括を行った。その上で、富山県内でのCSA構築の可能性について意見交換をした。
- ③生協による産直キッチンは、県内2箇所で開催され、約60名の生協組合員が参加した。本会有機農業生産者が自らの栽培方法等を紹介し、県内の有機農業に対する理解を深めることができた。また、CSA事例を解説した上で、その参加可能性について参加者に対しアンケートを実施した。その結果、回答者19名のうち、「参加してみたい」、「条件次第で参加する」が12名であった。63%が参加意欲を示しており、CSAの仕組み方次第で可能性が広がることがわかった。
- ④本会会員による収穫祭には、約30名が参加し、有機食材の加工方法を学ぶなど有機農業についての理解を深めることができた。

教訓

周辺に農村が広がり、また、親戚関係に農家もいる消費者世帯が多いなかで、農作業への参加機会も提供するCSAを構築するには、余程の消費者意識の向上を図る必要がある。

特定非営利活動法人 ISC糸島スポーツクラブ

活動名 | コミュニティカフェ 寄り合い処プロジェクト ST-2

活動のきっかけ

「グリーンコープ生協ふくおか いとしま店」の一角を交流・体験及び発表の場として有効活用し、地域のふれあい交流広場としてはどうか?・・・との話し合いの中から今回の活動が生まれ、2年目となりました。

活動内容概要

1. 「水カンリンバ工作」紙と空き缶とで楽器作り～音楽を奏でるまでを体験。
2. 「紙コップロボット工作」紙コップ&電池&モーターで手作り工作～動作競技まで。
3. 「ハロウィンパーティー」様々なレク遊びとゲームを入れての家族交流。
4. 「ポリマークレイ工作」粘土樹脂での創作工作を親子で作りました。
5. 「ハッピーXmas パーティ」レクで笑い一杯の遊び&創作ツリー工作体験広場。
6. 「ハッピー筆文字教室」筆ペンによるあたたかい文字の練習をしました。
7. 「感じてアフリカンリズム!」打楽器を皆で打ち鳴らし体感リズムのUPを図りました。
8. 「竹細工」竹とんぼ&竹馬&水鉄砲を作り、親子で遊び各種体験をしました。



協同した団体

- グリーンコープ生活協同組合
ふくおか いとしま店
- コミュニティカフェ&デリことこと

地域の概要

- ・親子で一緒にふれあう場や、家族だけでなく多くの家族間交流の場が少ない。
- ・子育て中の親の孤立による悩み、問題の内在化がみられる。
- ・子どもたちの多くがTVやゲームに熱中し、実体験の時間が減少している。

以上の課題を克服し解決すべく、様々な体験交流広場のイメージで開催しました。



他団体と協同することで発見したこと

様々な資格と技術を持った方々やボランティア精神溢れる献身的な方々、諸団体との交流を通じ、今まで互いに知り得なかった分野について、双方で理解が深まりました。又、単独で開催するよりも双方の知人・友人への口コミ等で、事業の周知拡散がスムーズにいきました。更に、今後も何らかの形で連携してできることを模索しつつ、事業の広域化と内容の充実を、目指して参る所存です。

将来イメージ

- 地域の様々な力あるリーダー（各種資格所有者や指導者）との連携強化、及び各種団体&組織との連携事業の拡充を図りつつ地域ネットワーク構築を図って参ります。その中核とも言える《コミュニティカフェ寄り合い処》としての機能拡充を図って参ります。
- トータルデザインプロジェクトとしてスポーツ/レク/文化/自然/歴史/国際/街づくり等の企画運営を通じ、地域活性化に連動する事業展開を図って参ります。
- 各種事業の企画運営に携わる機会を通じ、新たな人財の発見、育成、糾合を図って参ります。

成果と教訓

成果

- 親子ふれあい交流の場を設定し、参加者に大いに満足をいただけた事。
- グリーンコープ内の「ことこと会場」での開催で、正しく《コミュニティカフェ寄り合い処》の場となりました。
- 幼児～高齢者まで様々な交流が生まれ、新しいネットワークの創出がみられました。

教訓

- 最後の「竹細工教室」で、竹とんぼによる目の怪我が発生。開催前の安全操作への注意喚起が足りず、怪我に繋がった可能性がありました。
- 日程の開催時期と地域&学校行事が重なり、参加者が少なかった教室がありました。事前に行事&イベント重複が判れば、極力日程変更を含め修正検討すべきでありました。
- 各教室毎にチラシを配布すれば、もっと参加者が増えると思えます。

特定非営利活動法人 ユースコミュニティ

活動名 | 地域子ども未来塾

活動のきっかけ

学校や塾とは違う第三の教育機関になること、困窮家庭の子どもの居場所をつくり、子どもの自己肯定感を育むことを目指して活動を開始しました。「学校ができないことを塾に任せきりでよいのか？ 塾に行けない子どもは基礎学力を保障されなくてよいのか？」と疑問に感じた社会人や大学生で活動しています。

活動内容概要

経済的困窮、発達障害・学習障害のグレーゾーンなど、学校の勉強に困難を抱えている子ども達のための学習支援に取り組みました。教室の会場として、趣旨に賛同してくれたパルシステム東京大田センターの会議室を定期利用。毎週月曜の夜に教室を開催しました。

利用希望者が増えたことから、昨年度同様、パルシステムの会議室を2カ所使用し、延べ22名の子ども達（小4～高1）の学習を支援しました。

引き続き、教材メーカーとも連携し、通信教育の提供も交えながら子ども達の支援を行いました。

また、子どもの学習を指導するスタッフについても、地域の社会人や大学生などで構成されるボランティアの協力を得ながら、子どもに直面して学習指導。さらには、課外活動（クリスマス・スポーツイベント・地域のお祭りの手伝い）も取り組みました。

協同した団体

- 生活協同組合パルシステム 東京
- 大田区社会福祉協議会
- セカンドハーベストジャパン

地域の概要

大田区は23区で一番面積が広い行政区です。そのため一口に子どもの課題・貧困問題といっても、地域によってその特色は異なっています。

他団体と協同することで発見したこと

パルシステム東京の協力のもと、地域特有のニーズを詳しく把握することができました。大田区でもパルシステム東京大田センターがある仲池上の地域は、高級住宅地が近いということもあり比較的裕福なところですが、子どもの学習面についていえば、多様な困難を抱える子どもが多くいることがわかりました。さらに外国にルーツを持つ子ども、軽度の発達障害がある子どもの参加もあり、学習支援の多様なニーズがあることがわかりました。

また福祉や教育機関につなげる活動では、不登校の問題、シックススクール（過敏症）など、今を生きる子ども達の様々な困難を肌で実感することができました。

将来イメージ

3年間の助成で地域に根差した活動を着実に取り組むことが出来ました。毎年入会希望者が定員一杯になるぐらいの応募があります。地域からの支援者の受け入れ、定着、支援スキームも定着し、今後は広報や研修にそれほど支出をかけなくても事業の継続が可能な運営をすることが可能になりました。

今後は学習支援だけに留まらず、子ども達の居場所づくりを充実させ、イベントや地域と連携した活動についても積極的に取り組みたいと思っています。

成果と教訓

成果

助成最後となる今年度、年間を通じて18人以上の生徒が参加。中学3年生は全員1次志望の高校に合格することができました。子どもの学習を見守るボランティアもさらに定着しました。ある大学生ボランティアについては、この活動を通じて子ども達の置かれている困難な状況を改善する仕事につきたい希望が生まれ、大田区の職員を目指し、見事公務員試験にも合格、4月から社会人としてこの活動に引き続き関わる予定です。

ボランティアスタッフ研修も定期的実施。今年度は大田区の元ケースワーカーや地元の子どものスポーツ団体や動物愛護団体など多様な活動をされているNPOの専門家を招き、子ども達の支援について学習。団体同士の連携体制を深めることも出来ました。こうした研修が困難を抱える子ども達への支援実践に生かせればと思います。

課外活動にも積極的に取り組み、支援者と子ども達の交流を深めることができました。

教訓

特に広報はしませんでした。口コミや生徒の友達など多くの入会希望があり、一時期は机と椅子のMAXである20名の子ども達が同時期に利用していました。現在までの取り組みに対する地域からの評判など、地道な地域活動の成果が出てきたと考えています。

そして今年度、法人として支援業務の全体像と子どもの貧困問題を把握するためのボランティアマニュアルを作成しました。特に個人情報や危機管理については、困窮家庭を対象にしている事業の特性上、慎重かつ厳格な規則が必要であることを意識して研修を行ったほか、区内の青少年育成団体を講師として招き、子ども達の情操面についてもスタッフ内で学習しました。

特定非営利活動法人 熊本県子ども劇場連絡会

活動名 | みんなで学ぼう0123 (おいっちにーさん) ! ~メディアとあそびについて~

活動のきっかけ

「テレビはいつから見せたらいいのか?」「レストランで1、2才の子にスマホを渡し親同士おしゃべりしている!」といったことが話題となり、メディアの学習会を計画しました。一方では「親子でどんなあそびをしたらいいかわからない!」との声もあり、あそびのワークショップも計画しました。

活動内容概要

<子どもとメディア・子どもとあそび>について学ぶ

- ・2018年11月18日(日) 男女共同参画センターはもにい (託児有)
講演会 「子育てとメディア」

講師: 是石尚子氏 (NPO法人子どもとメディア公式インストラクター)

- ・2018年10月30日(火)、11月28日(水) くもと県民交流館パレア
乳幼児親子あそびの会「りっちゃんとあそぼう」0~3才親子対象
・1回目「ヘビママのたまご」 ・2回目「おいもごろごろ」

講師: 佐藤律子氏

(NPO法人 あそび環境Museumアフタフバーバン 専任スタッフ)

協同した団体

- ◎グリーンコープ生活協同組合くもと

地域の概要

子どもの出産後早くから保育園に預けて働くママが多く、子育て仲間が作りにくい現状があります。また、子育て支援のあり方が、場所の提供になりがちで、一步入って悩みを出し合える関係づくりが難しくなっています。



他団体と協同することで発見したこと

- 今の乳幼児子育て真最中の親の声がきけて、企画に反映することができました。
- 当日の係も一緒に行くことで、より関係が深くなりその後も続いています。

将来イメージ

- メディアの学習会は、年に1回は続けて企画をしていきたいです。
- 今後、幼児から小学校低学年の子どもとその親を対象に、小学校校区くらいの地域で、定期的なあそびの会を開き、親子共にホッとする時間をつくっていきたいです。
- あそびの会が地域の居場所(ハード/ソフト面)になると、様々な住民同士の交流ができ、その中で子どもたちが見守られて育つ、地域づくりの一環になるのではないかと思います。そのためにも、あそびの会ができる人材をたくさん養成していきたいです。

成果と教訓

成果

<メディアの学習会> 参加者51人、託児19人、関係者10人

- 子どもの成長に際し、メディアとの付き合い方がわからない方や、影響について知りたい方がいらっしゃいました。データを元にした話や実際の子ども声など、分かりやすい内容でした。アンケートでは、「もっと多くの人に聞いてほしい」、「具体的にスマホ接触を控えたり、テレビの時間を決めたい」との声が上がり、企画を評価できると考えます。

<乳幼児親子あそびの会> 1回目18組 2回目21組 関係者各8人

- 普段「子どもを遊ばせなければ!」と思っている親が多いです。2回とも大人と子どもが遊ぶプログラムで「夢中になって子どもとあそべて楽しかった!」「他の子どもと遊ぶわが子の姿に、新たな発見があってよかった」という声がありました。スタッフも一緒になって遊びながら寄り添うことで、親も安心して自己解放でき、より積極的にあそびに関われました。「また家でもやってみたい!」との声がありました。

教訓

- 講演会の内容を事前に詳しく聞いておくと、声掛けにもっと生かされたかもしれません。
- あそびの会は乳幼児対象のため、当日具合が悪くなったのキャンセルが数組ありました。募集時はそれを見越して組数を多くしてもいいと考えます。

生活協同組合とくしま生協

活動名 | 福島の子ども保養プロジェクト

活動のきっかけ

福島県生活協同組合連合会から、「たくさんの子どもたちやその保護者をケアすること」「大脳辺縁系は幼児期から9歳までしか成長できず、屋外で遊ぶことや自然から受ける刺激が大切で、震災の年に生まれた子どもが満10歳を迎える2021年3月までは継続させることが必要」との話を聞き、とくしま生協で取り組みを検討し実施するに至りました。

今回2回目となりますが、福島の子どもたちと保護者のみなさんをお招きし、楽しく、明るく、元気に思いっきり遊び、「全員笑顔いっぱい」を目指して取り組みました。

協同した団体

- 福島県生活協同組合連合会
- フードバンクとくしま

活動内容概要

福島県生活協同組合連合会を通じて募集し、7/24（火）～7/26（木）2泊3日、6家族20名の親子を招待しました。

【実施要項】

7/24（火） 福島空港⇒伊丹空港⇒徳島県三好市：妖怪屋敷、祖谷かずら橋、びわの滝、近隣川辺で水遊び

7/25（水） ラフティング体験(徳島県三好市)⇒阿波踊り会館(阿波踊り体験)

⇒ありがとうパーティー（阿波弁+福島弁クイズ、寄せ張りづくり、ゆるキャラ等）

7/26（木） 鳴門公園(エスカヒル、渦の道)⇒伊丹空港⇒福島空港



他団体と協同することで発見したこと

子ども食堂の活動もされているフードバンクとくしまは、積極的に交流会の進行や雰囲気づくり、楽しい演出をしてくださいました。また協同・連携することで、特に子どもに関する共通の意義・目的課題を共有でき、地域での活動の可能性と発展について相互に高め合うことができたと考えます。

将来イメージ

被災地の思いを忘れることなく、継続することを目指して頑張りたいと思います。今回も参加者の何気ないお話しの中から、将来への不安を感じられていることをお聞きする機会がありました。微力ではありますが自分たちができることを進めて行きたいと考えています。

成果と教訓

成果

ラフティングは全員参加、怖いかずら橋を渡ったり、みんなで阿波踊りをしたり、親子で触れ合いながら、いつも以上の笑顔で楽しんでいただけたと感じています。保護者（親）も子どもの目線に合わせたかのように見えますが、子ども以上に楽しまれていました（感想文にも書かれていました）。

また、妖怪屋敷の企画はつまらないかもと考えていましたが、大人と子どもの感じ方の違いか、子どもたちからは好評で今後の企画への参考となりました。今後も、より親子のふれ合いを大切にできる企画を継続していきたいと思います。

教訓

子どもは元気そうに見えますが、行程はできるだけ余裕を持たせ、自由時間を意識してつくることが必要だと感じました。去年は車酔いされる方が数人おられ、行程を子どもに合わせるが必要だと感じています。

食事は量や好き嫌いによって、子どもの食べ残しも多くありますが、あまり嗜好に合わせ過ぎず、地域の食材や文化に触れることができるようにと考えています。

新潟県立大学 南相馬市子ども支援プログラム

活動名 | 南相馬市児童クラブにおけるすべての地域で実施する「交流おやつタイム」プログラム

活動のきっかけ

私たちの団体は、福島県からの避難者のための新潟市避難所「子ども専用ルーム」の運営をきっかけに、2011（平成23）年3月から活動を開始した。その後、南相馬市教育委員会との連携協定の締結（2015年3月）により、南相馬市の児童センター・放課後児童クラブ11か所を対象に、子ども支援スタッフが、持続性のある被災地子ども支援を進めている。

活動内容概要

南相馬市のすべての地域の放課後児童クラブを対象に、子どもとおとなが交流するおやつタイムを実施することで、子どもたちの豊かな放課後の生活づくりを支援した。その際、おやつ（品物）を届けるだけではなく、コープにいがた組合員による「食育教室」を実施することができた。

具体的には、新潟県立大学とコープにいがたおよび南相馬市教育委員会が協同して、南相馬市全域の放課後児童クラブ（11か所 15クラブ 約700名）を訪問することができた。



協同した団体

- 南相馬市教育委員会
- 生活協同組合コープにいがた

地域の概要

東日本大震災の被災地である福島県南相馬市の小学生は、原発事故の影響で、震災直後から、原町区、鹿島区の2地区のみに生活環境が制限されてきた。しかし昨今、小高区を加えた3地区で小学校・放課後児童クラブが再開されることになり、とくに原発最寄地区の小高区を加えた全地域の子どもの支援が新たな課題となっている。



他団体と協同することで発見したこと

南相馬市においてコープにいがたとの協同は、支援を要する子どもたちに安全・安心なおやつパッケージを届けてくれる団体として南相馬市で高い信頼を得ていることから、「食育教室」の内容に説得力があった。

さらに、南相馬市教育委員会との協同は、対象となる放課後児童クラブの子どもたちとの重要な仲介役になることから、広域での活動が実現した。

将来イメージ

今回の申請活動の一部は、これまでも実施されていた活動であったことから、将来的には、自治体主催の活動プログラムへと発展させることが可能であり、引き続き継続性を担保することができる。

成果と教訓

成果

「交流おやつタイム」を繰り返し実施することは、プログラム実施者と子どもたちとの信頼関係を構築する有効な手段になった。また、コープにいがた組合員による「大型絵本の読み聞かせ（かわいそうなぞう）」および「食育教室」の実施は、実施者と子どもたちとの交流を促すプログラムとなった。

南相馬市の子どもたちとの交流後は、参加したすべての子どもたちと「またね」の約束をしてプログラムを終了した。（参加者数）

子ども：約700人（2017年度約650人）

おとな：35人（2017年度30人）

スタッフ等：50人（2017年度40人）

教訓

南相馬市の子どもたちは、震災後の環境条件の変化による生活不安の影響で、自己肯定感の醸成など生きる力の獲得が深刻な課題となっている。今回のような信頼関係にもとづく交流活動は、子どもたち自身の喜びと自己肯定感を育み、被災地でもあきらめない子どもたちの将来の希望へとつながることを確信した。被災地子ども支援プログラムを継続的に進めるためには、継続的、重層的なプログラム担保されることが必要であることを痛感した。



活動名 | 親子で楽しめるキッズスペース

活動のきっかけ

スタッフ全員が幼い子どもの育児中で、地域の高齢化が進み、同世代のママさんとの交流が少なく、気分転換や情報交換の場が身近にあったらと思っていました。子育て中のママさんや地域の方々が気軽に集える場所を作り、近隣のつながりを深め、地域の活性化に繋がっていきます。またスキルを持ったママさんの活躍できる場としても活用し、女性の起業のお手伝いをしていきたいと考えています。

活動内容概要

- ・親子で利用できるフリースペース（無料）
- ・マタニティ & ベビーマルシェ…妊婦さんから乳幼児の親子を対象とした内容
- ・季節のイベント（縁日・ハロウィンパーティ・クリスマス会など）
- ・子連れで参加できる講座の開催（ベビーリンパ、ウクレレの会、ミシンの会、おひるねアートなど）
- ・外部でのマルシェ（ハンドメイド商品の販売や飲食ブース、エフコープの試食会など）の開催



協同した団体

- おうち de マルシェ
- 三礼庵（サンレー）
- エフコープ生活協同組合

地域の概要

子育てしやすい街として有名な北九州は、子育て世代の若いご家庭の通勤族が多く、近隣との繋がりはなかなか難しいようです。そこで子育て世代の私たちは、少しでも多くのママさんが繋がれる手助けが出来たらという思いから地域に密着した「子育てフリースペース puchi puchi café」を開所いたしました。

子どもやママさん同士の交流や情報交換などを気軽にできるスペースです。またこの辺りは高齢者の独り暮らしが増えている地域なので、近隣と助け合って子育て出来る環境を今の時代にまた呼び戻していきたいと考えています。



他団体と協同することで発見したこと

子育て世代のお客様が多いおうち de マルシェに移動キッズスペースで参加させてもらいました。私たちの活動を多くの方に紹介することができ、そして逆にpuchi puchi caféの常連さんが遊びに来てくださり、繋がりが増えていきました。また会場となった三礼庵の場所をたくさんの方に知っていただけました。

エフコープの試食会では、実際に美味しくて便利な離乳食や食品、お菓子など食べていただき、ご家族でエフコープの良さを体験し、知っていただけたかと思います。

他団体と一緒に活動することによって、より大きな繋がりと笑顔をいただくことができました。

将来イメージ

色々なジャンルの団体や企業と一緒にイベントを行い、子育て世代のニーズに合った内容のイベントを開催したいです。また子連れで遊べる施設やイベントがない地域に出向き、出張の子育てスペースを開催していきたいです。子育てが終わった世代の方々と子育て真っ最中の世代が交流できる場も作ってきたいです。

成果と教訓

成果

ご来場者数約100人前後

年間ご来店者数1,654名（大人962名 子ども692名）

子育て中のママやその子どもたちとの交流や情報交換の場として手作りの月刊新聞や口コミ、広報誌などで少しずつ認知されるようになり新規の利用者が増えました。現代のママさんは育休での仕事復帰の方が多く、今の時間を大切に楽しく過ごしたいと思う方は多いようです。育児だけの時間だけでなく、自分の時間を過ごせることの喜びは大切なことです。そんな時間を少しでもお手伝いすることが出来たのではないかと思います。また、同業者同士の横のつながりも増え、情報交換をしながら連携していったことも良かったと思います。

教訓

早くから仕事復帰されるママが多くなった今、ターゲットとなる子どもの年齢も下がり、利用されるほとんどが乳幼児です。その年齢に合った内容のイベントやお店づくりを意識していかなければいけません。スタッフ一人ひとりがアンテナをはって、利用者のニーズに合ったものを取り入れられるよう努力していきたいです。

生活協同組合CO・OPとやま

活動名 | 女性と子どもが農業や食を通じ生きることへの学びとする活動

活動のきっかけ

生きる力。その根本には食べること。地域社会での暮らしから一步外に出て、改めて農業やその回りの環境の中で自分達が生かされていることを実感してほしいです。そして、子どもやママが生き生きとした自分らしい生き方に気づききっかけづくりを目的としました。

活動内容概要

- ・「行こう！ 学ぼう！ おでかけ隊」という親子活動では、循環型農業を実践している「土遊野」（CO・OPとやまの支部産直指定の産地）の見学・自然体験を行いました。
- ・地域の小学校にも参加募集チラシを配布し、組合員以外の親子が参加しました。
- ・富山県有機農業研究所と共催で「田んぼの生きもの調査」や「土遊野」で栽培された有機米、有機野菜を使用したカレーライスを昼食とし、農業と自然についての関わりなどを体験することができました。
- ・「よちよち広場」という乳幼児とその保護者の活動では、栄養士を講師として栄養教室を開催、乳幼児の食事で気をつけたいこと、添加物のこと、農薬のことなどについて講義をいただき、有機米を使った簡単なおやつを試食しました。
- ・周辺地域で「よちよち広場」参加募集チラシを配布し、組合員以外の乳幼児を育てる保護者にも参加していただき、生協の取り組みを広く知ってもらうきっかけになりました。



他団体と協同することで発見したこと

富山県有機農業研究会と協同することで、これまでの活動より広がりが見られ、食と農業・自然との関わりを参加者にも実感していただける活動になりました。

将来イメージ

地域の中で、親子が気軽に生協の活動に参加することで、食・自然・環境・農業など様々な事柄に関心を持ち、一緒に楽しみながら、家庭でも学んだことを実践できるような取り組みをすすめていきたいと思います。

成果と教訓

成果

- 「行こう！ 学ぼう！ おでかけ隊」参加者13組39人（内組合員以外の参加者 5組14人）、スタッフ6人が協力しました（CO・OPとやま3人、富山県有機農業研究会3人）。申し込みは、39組111名、山あいの産地のため大人数での訪問が難しかったため、抽選でたくさんの方をお断りするほどの人気イベントとなりました。
- 「よちよち広場」参加者19組38人（内組合員以外の参加者7組14人）、スタッフとして5人が協力しました。（内CO・OPとやま3人、富山県有機農業研究会2人）通常の10組前後の参加者数に比べると、共催した回は参加者が増えました。また、小麦・卵を使用しないおやつや、ご飯おやきには有機栽培米と醤油麹を使い、材料にこだわったおやつを提供することができました。

教訓

有機農業研究会と協同することにより、生きもの調査の講師の方を紹介していただき、新たに「田んぼの生きもの調査」という活動や、有機栽培米・有機野菜というこだわりの食材を準備することができ、活動内容がこれまでより充実したのになりました。また、組合員以外の地域の親子に気軽に生協の活動に気軽に参加していただけるきっかけとなり、広く生協の活動を知らせることができました。

協同した団体

◎富山県有機農業研究会

地域の概要

富山県は働く女性が多く、働きながら子育てをされる方が大半です。子育て期間を忙しく過ごす母親が多くいらっしゃいます。

あくらす

活動名 | 地域で繋がり、生活しあい、育ちあう場所の提供と安心して暮らせる地域を目指す拠点づくり

活動のきっかけ

NPO法人たんぽぽルームの活動を応援し、古民家などの居場所を探している中、ワークショップでコープこうべと接点を持つ機会ができた。そこで、コープこうべ安倉店を活動場所として提案して頂き、現在のコープこうべ安倉店2階ふれあい広場を利用させて頂くこととなった。

活動内容概要

地域の団体の孤立を予防するためのネットワークの形成づくりとして、「あくらすカフェ」コープこうべ安倉店を利用し、来店利用者の方にコーヒー、紅茶、手作りお菓子などを提供し、居場所作りとして寛いだ時間を提供する。また、孤独、孤立した高齢者にも声をかけ交流を図る。

「ハンドメイドマーケット」地域のハンドメイド作家さんに来店してもらうことにより、作家、組合員、ワークショップ参加者の方にコープこうべ安倉店への用事を作り、交流を図る。

「ワークショップ」地域の方に講師になっていただき、参加の組合員、ワークショップ参加者の方にハンドメイドの時間を共に楽しんでもらう充実した時間と場を作る。

「夏休みKIDSイベント」週一回イベントを開催することにより、子供の健全育成、異年齢交流を行う。

「あくらすマルシェ」コープ安倉店2階 催事スペースを利用し、16店舗の出店者ブースで開催。



協同した団体

- 生活協同組合コープこうべ安倉店

地域の概要

安倉地区では地域の子育て中の方やシニア世代の方との接点が極めて少なく、生活時間帯、女性の社会進出促進や、ネット社会の普及によりますます地域住人の間のコミュニケーションが希薄になって行くという問題を抱えている。



他団体と協同することで発見したこと

- コープの事業所が地域社会の社会貢献の場として開放され、地域との協同、行政との協業といった新たな地域モデルを目指す。
- 行政をはじめ、地元の企業、ボランティア団体、NPOなど連携できないか協力を要請するなど「あくらす」と地域をつなぐ役割を担う。
- 店舗・宅配利用組合員への活動を広報することでの地域活動への参加・参画促進と地域自治力の向上。
- 生協利用者に高齢者が多いことから、多世代が交流することで高齢者の活躍の場の創出、自己実現達成へつなげる。

将来イメージ

4月以降の活動として、コープ安倉店を中心とした地域の高齢者に向けてハンドマッサージや、メイクによっておこるセラピー効果を活用しより元気に関係性を深めていく活動を予定している。また、音楽セラピーと世代間交流を目的に音楽イベントを開催予定。

地域での認知度を増やす活動と内容の充実を図ることによって、より地域に溶け込み、居場所拠点となることにより世代間交流の場となり、地域住民にとって安心できる居場所となっていく事が考えられる。

成果と教訓

成果

地域での孤独・孤立を防ぎ、健全なる地域社会に寄与しているだけでなく、職員・地域・消費者や、団体同士の繋がりを創出している。

- あくらすカフェ：高齢者との接点の場所であり、交流の場としてだけでなく、孤独・孤立を防ぐコミュニティ作りの場所ともなっている。また、従業員、来客との交流の場ともなり、良好な関係性を深めている。
- ハンドメイドマーケット：普段接点を持たない人脈を作り、地域だけでなく、世代間交流をすることができた。
- ワークショップ：地域の方が講師になり、製作を目的に参加者と交流する時間を持つことによって、地域の高齢者や子育て世代の母親と接点を持ち、世代間交流ができた。子育て世代の母親の限りある自分のための時間を利用したリラックスの場であり、自己実現の場を提供。
- あくらすマルシェ：障害者施設の方々の来場により、地域の利用者・出店者と障害者との関りを作る。普段接点を持たない人脈を作り、地域だけでなく、世代間交流をすることができた。

教訓

今までやっていなかった新たなイベントをコープこうべ安倉店にて打ち出すことで、地域の繋がりの場、コミュニケーションの場を創出し、イベントや活動により関係性を増やすことができ、孤独な子育てや社会で接点を持たない方からシニア世代まで、接点を作り、孤独から解放され、地域が生き生きと繋がりが合い、安心して生活できる地域を確立できてきたこと。

金子みんな食堂運営委員会

活動名 | 学習支援付き食事会

活動のきっかけ

中四国地連主催の「あったか地域づくり交流会」に参加したコープえひめの理事(当時)が刺激を受け、コープえひめの運営企画部と一緒に知恵を出し合った。

活動内容概要

- ・月一回、毎月第3土曜日開催
- ・コープえひめの店舗の組合員活動室を利用
- ・10時から12時までは学習や集団遊び、企画の時間
- ・12時から食事会
- ・参加費 4歳以上高校生まで 100円、大人 300円、4歳未満無料

協同した団体

- 金子みんな食堂運営委員会
- 生活協同組合コープえひめ

地域の概要

企業城下町であり港町でもある。安定した家庭も多いが雇用が不安定であったりシングル家庭も多い。



他団体と協同することで発見したこと

「生協は、あったかい」

お手伝いや講師だけでなく、お店の方の対応、声掛けなどにも温かみを感じる。

お店自体が地域になくてはならないものなので、そこで毎月定期的にしていることで「みんな食堂」も知られ、広まってきたのかなと思う。

将来イメージ

子どもたちが運営に関わる「子ども運営委員会」をつくり、企画段階から子どもの意見や発想を取り入れて本当の「みんな食堂」にしていきたい。

成果と教訓

成果

- 参加のべ人数 子ども 183人(4歳未満含む) 大人 92人(スタッフ含む)
昨年度より広がっている。新しい子が来ても何の違和感もなくすぐ溶け込めるおおらかな空気が育っている。スタッフに関して、4人の中心メンバーがそろわないことが多くあったが、代わりにいろんな方がお手伝いに入ってくれて、そこにも広がりがあった。母同士の情報交換やおしゃべりも楽しい。人付き合いの苦手なお母さんや学校に行きづらくなっている子どもも楽しそうに毎回参加してきている。

教訓

- お知らせについて
小学校3校と3つの公民館にプリントを配布してもらっている。
また、コープのお店には参加申し込み用のポストとプリントを置かせてもらっている。
プリントを出すタイミングが遅すぎると参加希望が少ないのはもちろん、早すぎても忘れられるので、タイミングが大事。
- スタッフについて
代表と同じ熱意で一緒に考え行動してくれるスタッフを増やすことが必要。



2018年度 CO・OP共済 地域ささえあい助成 団体交流会 開催報告

2018年度 CO・OP地域 ささえあい助成 団体交流会を、関西と関東の2会場で開催しました。

交流会は助成団体の活動の事例報告や意見交換・交流を行う場として、

助成の活用を検討されている生協や、地域の団体からのご参加も広く呼びかけています。

当日は、2会場合わせて54名に参加いただき、地域と生協の共生をテーマに、

講演や助成団体による活動報告、参加者の交流を目的としたワークショップ等を行いました。

開催日時

- 博多会場：2018年11月27日(火)
13時～17時
- 仙台会場：2018年12月13日(木)
13時～17時

開催場所

- 博多会場：TKP博多駅前
シティセンター ホールA
- 仙台会場：仙台ガーデンパレス
鳳凰の間



博多会場の様子



仙台会場の様子

開催内容

※所属・役職名は当時のものです。

◇開会挨拶

博多会場

日本生活協同組合連合会 組織推進本部
九州地連 鈴木 浩文 事務局長

仙台会場

コープ共済連
佐藤 利昭 代表理事理事長

◇地域ささえあい助成のご説明

◇基調講演

博多会場

日本生活協同組合連合会 組織推進本部
サステナビリティ推進部 板谷 伸彦 部長

＊「コープとともに地域ですすめる
ずっとつづく世界とくらしづくり！」

仙台会場

同志社大学社会学部
上野谷 加代子 教授

＊「たすけられ上手・たすけ上手に生きる
～参加と協働で創る地域づくり～」

◇助成金活用団体による活動報告

博多会場

- ・エフコープ生活協同組合
「『平成29年7月九州北部豪雨』災害により
設けられた応急仮設住宅自治会と協同した活動」
- ・特定非営利活動法人 いなほ
「みんなで作る地域の居場所づくり
～こども食堂の活動を通して～」

◇団体交流（ワークショップ）

- ・ファシリテーター（2会場共通）：
特定非営利活動法人 日本NPOセンター 吉田 健治 事務局長



仙台会場

- ・北海道子どもの本連絡会
「第41回北海道子どもの本のつどい砂川大会」
- ・南大沢を知ってほしい会
「『みなみおおさまカフェ』の開催を
主として大学と地域を結ぶ」



◇閉会挨拶

博多会場

コープ共済連 総合マネジメント本部
渉外・広報部 国分 聡人 部長

仙台会場

コープ共済連
佐藤 利昭 代表理事 理事長

参加者の声

- 協同の良さ、むずかしさ、きちんとした意識をもって活動することの大切さを知りました。
- 『無理せず』『多くの仲間と』『楽しく』はいろいろな活動のキーワードだと思いました。
- ワークショップをしながら交流が深められました。
- 全国の生協のつながりの素晴らしさに感動しました。

✳2019年度の開催予定

- 東日本会場（東京）：2019年11月21日（木）13時～16時半
日本生活協同組合連合会 コーププラザ
- 西日本会場（岡山）：2019年11月29日（金）13時～16時半
生活協同組合おかやまコープ オルガホール



詳細のご案内および参加申し込みの方法は、
夏頃にコープ共済連公式ホームページ上でご案内予定です。
皆様のご参加をお待ちしています。



地域ささえあい助成

— 生協と他団体が協同する活動を応援します —

2018年度 募集のお知らせ

CO・OP共済は、「自分の掛金が誰かの役に立つ」という組合員どうしの助け合いの制度です。コープ共済連はCO・OP共済を通じて豊かな社会づくりをめざしています。その活動の一環として、生協と地域のNPOやその他の団体が協同して地域の暮らしを向上させる活動を支援します。全国の生協、NPO、その他の団体の皆さまからの多数のご応募をお待ちしています。

応募期間

2018年1月8日
～1月31日
(当日消印有効)

応募条件

活動テーマ

以下①～③の対象となる活動の
テーマいずれかに該当すること

必須条件

生活協同組合とNPO・ボランティア
団体等が協同した取り組みであること

対象となる活動のテーマ

①「暮らしを守り、暮らしの困りごとの解決に資する」

例 地域住民による高齢者等への生活支援のコーディネート、障がい者の就労支援、震災による避難者へのカウンセリングの取り組みなど

②「命を守り、その人らしい生き方ができるようにする」

例 病気やケガで治療中の方やそのご家族への治療に専念できる環境の提供や、治療中における精神面でのサポートを通して生活の質の向上を目指す取り組み、病気の予防や早期発見を目的とする啓蒙活動など

③「女性と子どもが生き生きする」

例 子育てひろばの開設・運営、出産後の再就職や社会復帰を支援する取り組み、DV被害者からの相談を受け付ける活動など

対象となる活動期間

2018年4月1日～2019年3月31日の間に実施する活動が対象です。

必須条件～生協と他団体の協同～

次の①、②いずれかを必須とします。

- ①生活協同組合以外の団体(NPO法人等)が応募する場合には、活動内容が「生活協同組合と協同して行うもの」である
- ②生活協同組合が応募する場合には、活動内容が「生活協同組合以外の団体と協同して行うもの」である

- 日本国内を主たる活動の場とする生活協同組合、NPO法人、任意団体、市民団体を対象とします。
- 今後設立予定の団体でも構いません。
- 「協同して行う」とは、受注委託の関係ではなく、対等平等で企画を一緒に作り、ともに活動する関係をいいます。
- 「協同」についてご不明な場合は、日本生協連 地域・コミュニティ担当(03-5778-8135)までご相談ください。

〈対象とならない活動〉— 以下、例 —

- ※左記の①～③のいずれのテーマにも合致しない活動(環境問題等)
- ※生活協同組合同士の活動(100%子会社も含む)
- ※生活協同組合単独もしくはNPO法人等の団体単独の活動
- ※生活協同組合が、対象となる活動期間中に「CO・OP共済健康づくり支援企画」より助成を受ける活動(応募を予定している場合や、審査中の場合も含みます)

助成内容

助成額は、1事業あたり最大100万円を基本としますが、審査委員会が認めた活動に限り、それ以上の助成額になることがあります。

助成総額は2,500万円を予定しています。

●助成の対象となる費用●

- 活動に直接関わる経費（資材費、消耗品購入費、旅費、交通費、印刷製本費など）
- 講師謝礼、指導料など

●助成の対象にならないもの●

- 飲食費、接待費、保険料、人件費（協同する団体の職員に対する謝礼金を含みます）
- 助成を受ける事業以外の運営に係る費用
- 営利を目的とする事業
- その他、審査委員会が不適切と判断したもの

活動報告

助成を受ける団体には、所定の報告書をご提出いただきます。その他に、活動の様子について訪問や取材をさせていただく場合がありますので、ご協力をお願いいたします。

活動報告は、コープ共済連のホームページや冊子等に掲載し、ご紹介させていただきます。

応募方法、提出書類

①応募要項、応募用紙の入手方法

コープ共済連のホームページよりダウンロードいただくか、下記「お問い合わせ先」までメールかFAXにてご請求ください。

URL <http://coopkyosai.coop/about/csr/socialwelfare/2018.html>

※ご請求の際には、団体名、郵便番号、住所、送り主の方の氏名、電話番号を明記してください。

②応募方法

応募にあたっては、応募要項をよくお読みいただき、以下の書類を事務局宛にご送付ください（メール、郵送のみ可）。

応募団体へは事務局から書類受領通知をメールにて行います。2018年2月15日頃までに受領通知が届かない場合、事務局までお問い合わせください。

※FAX、持参による提出は受け付けておりません。

- 応募用紙
- 定款

（定款は応募団体がコープ共済連の会員生協である場合、ご提出は不要です。ご不明な場合はご相談ください）

- 見積書など（申請する費用の根拠となる資料）

お問い合わせ先

日本コープ共済生活協同組合連合会

渉外・広報部

地域ささえあい助成事務局宛

TEL 03-6836-1320（平日10:00～17:00）

FAX 03-6836-1321

メール contribution@coopkyosai.coop

応募書類提出先

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-1-13

コープ共済連 渉外・広報部

地域ささえあい助成事務局宛

過去の助成団体活動内容はホームページでご案内しています。

コープ ささえあい 報告集 検索

URL <http://coopkyosai.coop/about/csr/socialwelfare/report.html>



応募スケジュール

■応募期間：2018年1月8日～1月31日
（当日消印有効）

■審査委員会：2018年4月

■結果通知：2018年6月上旬
（第一報はメールで通知します）

■助成金の振込：2018年7月下旬

**CO・OP共済 地域ささえあい助成
2018年度 活動報告集**



発行日：2019年7月

発行元：日本コープ共済生活協同組合連合会
(渉外・広報部)

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-1-13

電話 03-6836-1320



CO・OP共済 地域ささえあい助成
2018年度 活動報告集



この印刷物は
植物油インキを使用しています。



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。